

平成28年度「スポーツキャリアサポート戦略」における
「コーチとしてのキャリア形成支援プログラム」実施報告書



平成29年3月31日
大阪体育大学

はじめに

大阪体育大学では、新しい時代にふさわしい運動部指導者を育成するため、「運動部指導実践論」を新規に開講しました。この授業は、「コーチ育成のための『モデル・コア・カリキュラム』の作成」事業(日本体育協会)を受け、このカリキュラムに準じた授業として構成しました。本報告書は、その試行の過程や教材、授業の効果についてまとめたものです。

この授業を開講した背景には、スポーツ指導における体罰・暴力問題の根絶を目指す、新しい時代にふさわしいコーチングのあり方を探ろうとする動きがあります。スポーツ指導における体罰・暴力問題は、2012年ロンドンオリンピックの興奮冷めやらぬ中、また2020年東京オリンピック・パラリンピック招致への期待が高まる中で次々と表面化しました。高校の運動部活動において指導者の暴力を背景に自死に至った事案ならびに日本代表女子チームにおいてハラスメントと認定される事案が起り、当時の下村文部科学大臣をして「スポーツ史上最大の危機」(文部科学省, 2013)と言わしめる事態に発展しました。文部科学省は、この声明を受け、「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)」を設置し、筆者も委員としてこれに関らせていただきました。

タスクフォースの提言を受け、翌年(平成26年)には大きく3つの革新的な取り組み(コーチング・イノベーション事業)が始まりました。そのうちの1つが、コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成プロジェクトでした。筆者はそのワーキングの座長を担当し、新しい時代にふさわしいカリキュラムの作成に携わり、多くのことを学びました。特に、「体罰はダメだと分かっているのにどうして暴力指導に陥るのか?」、言い換えれば「分かる」から「できる」への変換をどのように図るのか、は大きな課題でした。委員の先生方と、時に深夜にも及ぶ議論の末にようやく完成した「モデル・コア・カリキュラム」を「絵に描いた餅」にしないため、実際に試行してみようというのが今回の取り組みです。

この授業の最大の特徴は、「分かる」から「できる」への変換を図るため、コーチングの理念や哲学、人間力の育成に焦点を当て、アクティブラーニングを取り入れている点です。本報告書では、他大学や団体でも同様の試行ができるよう、講義マニュアルや関連資料、授業風景や受講生の感想などを多く収めました。また、授業前後における受講生の意識の変化についても調査を行い、その結果を提示しています。本報告書が、新しい時代にふさわしい運動部指導者育成の基礎資料となれば幸いです。ご関係の皆様には、本報告書をご覧いただき、ぜひ忌憚のないご意見をいただけますようお願い申し上げます。

平成29年3月31日

大阪体育大学 学長補佐 体育学部教授
スポーツ心理カウンセリングコース主任
土屋 裕陸

本報告書は、スポーツ庁委託事業「スポーツキャリアサポート戦略」(平成28年度)における「コーチとしてのキャリア形成支援プログラム」により、大阪体育大学が制作しました。したがって、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁ならびに著者の承認手続が必要です。

はじめに

1. 事業の概要

- 1-1 事業の背景と目的 03
- 1-2 実施体制 04
- 1-3 実施スケジュール 05

2. コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラムとは

- 2-1 モデル・コア・カリキュラムの成り立ち 06
- 2-2 モデル・コア・カリキュラムの骨子 06

3. モデル・コア・カリキュラムに準じた授業科目の開講

- 3-1 授業の枠組み 08
- 3-2 「運動部指導実践論」の概要 08
- 3-3 「運動部指導実践論」の実施 10

4. 「モデル・コア・カリキュラム」試行の効果

- 4-1 調査目的と内容、方法 13
- 4-2 受講前調査の結果：体罰・暴力指導の実態 17
- 4-3 受講後調査の結果：「モデル・コア・カリキュラム」試行の効果 21
- 4-4 受講生の学びの具体例 24

5. 事業実績のまとめ

- 5-1 コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」試行の成果 26
- 5-2 講義用マニュアルの作成に向けた課題等を検討・整理した成果 27

補遺. 運動部指導実践論 講義用マニュアル

- 1. 運動部指導の理念と哲学 30
- 2. 運動部指導者に求められる援用力 36
- 3. 運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識 44
- 4. 運動部指導における実践上の問題と対処法 48

資料

- 1. 映像教材の作成 54
- 2. 本事業の報道資料 58

1. 事業の概要

1-1 事業の背景と目的

日本体育協会は、『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成』事業をスポーツ庁より受託し、平成28年3月にその内容を取りまとめ、報告書を公表した。

このカリキュラム作成事業は、スポーツ指導における体罰・暴力問題の根絶を目指した「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）」の提言に基づき、コーチング・イノベーション推進事業（平成26～27年度）の中心的事業として展開された。いわば、わが国における「コーチ育成カリキュラムのスタンダード」を目指したものであった。専門家による討議と現場でのヒアリングにより作成されたカリキュラムは、理論と実践の往還を図っており、国際コーチングエクセレンス評議会John Bales会長からもその特徴が高く評価された。日本に固有なユニークな内容でありながら、国際的にも認められた普遍的なカリキュラムとすることができる。

今後はこのカリキュラムを、体育系大学において実際に実施し、その成果や課題、実施方法の改善策を検討・整理することが必要となっている。一方、大阪体育大学では、2013年1月24日「大阪体育大学の教育に関わる宣言」で「体罰と体罰を肯定する教育」を否定し、2015年、大学開学50周年を記念し策定した「大体大ビジョン2024」では「教育ビジョン」として「スポーツ指導における暴力根絶や学校教育における諸問題に対応できる人材育成」を重点施策に掲げ、全学を挙げて「体罰の根絶」にむけて取り組んできた。

以上から本事業では、(1) コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」を大阪体育大学で試行することとした。具体的には、新規科目「運動部指導実践論」を大阪体育大学にて開講・実施し、そこで用いた資料を基に (2) 「モデル・コア・カリキュラム」を実施するための講義用マニュアルや教材の作成に向けた課題の検討・整理を目的とした。また、授業の前後で受講生の体罰に関する意識調査を行うことで、その効果を検証することとした。さらに講師用テキストおよび講師用マニュアルの作成に向けた課題については、授業後の学生のコメントも踏まえて検討を行うこととした。

1-2 実施体制

事業の実施体制は以下の通りである。

①事業の実施代表:土屋 裕陸(大阪体育大学教授)

(役割)申請事業の統括ならびに取りまとめ

(経歴)平成25年スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)委員、平成26年～27年度スポーツ庁委託事業『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成』事業(日本体育協会)ワーキンググループ座長、平成27年スポーツ庁委託事業「スポーツキャリアサポート戦略」における「スポーツキャリアサポート推進戦略」(日本スポーツ振興センター)アドバイザー

②研究補助:山口 大輔(大阪体育大学大学院助手)

(役割)講義の実施に関わる事務的作業ならびに成果の検討に必要な資料収集と分析補助

(経歴)同志社大学大学院博士後期課程修了

③事業推進の補助:浦久保 和哉(大阪体育大学学長室ディレクター)

(役割)本事業の推進サポートならびに関係機関や有識者との連絡調整、平成28年度より本格稼働した本学の基幹事業であるDaitaidai Athlete Support & High Performanceプロジェクトとの連動

(経歴)大阪体育大学大学院体育学研究科生涯スポーツ学修了

三菱総合研究所、笹川スポーツ財団、東京マラソン財団などを経て現任。

④事業推進の補助:松本 和典(大阪体育大学学長室 主任※)(平成29年1月16日付)

(役割)本事業のサポートならびに事後処理

(経歴)大阪体育大学大学院博士前期課程修了

1-3 実施スケジュール

本事業は平成28年度に実施され、スケジュールは以下の通りであった。

■表1-1 実施スケジュール

実施時期	事業項目			備考
	コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の試行	「モデル・コア・カリキュラム」講義用テキスト(ワークブック含む)の作成に向けた課題の検討・整理	「モデル・コア・カリキュラム」講師用マニュアルの作成に向けた課題の検討・整理	
7月	実施計画書作成、提出及び契約締結事務 事業実施の企画・準備 講師や関係機関との連絡調整			
8月	▼ ▼	テキストの 企画・作成	マニュアルの 構成・内容の企画・検討	
9月	カリキュラム試行 (運動部指導実践論の開講)	▼ ▼	▼ ▼	
10月	▼ ▼	▼ ▼	▼ ▼	
11月	▼ ▼	▼ ▼	▼ ▼	
12月	▼ ▼	テキストの課題の 検討・整理	マニュアルの課題の 検討・整理	
1月	カリキュラム試行終了 受講生への意識調査	カリキュラム試行終了 受講生への意識調査	カリキュラム試行終了 受講生への意識調査	
2月	試行の課題、 調査の取りまとめ	意識調査の 取りまとめ	意識調査の 取りまとめ	
	▼	テキストの完成	マニュアルの完成	
3月	報告書の構成、記載内容を検討・精査			
	事業報告書の作成 次年度計画の立案			

本報告書では、「運動部指導実践論」の実施概要、「運動部指導実践論」試行の効果、それらを踏まえて考えられる改善策等を順に述べることとする。そして補遺として、「運動部指導実践論」の講義用マニュアルならびに関連資料を掲載する。

2. コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラムとは

2-1 モデル・コア・カリキュラムの成り立ち

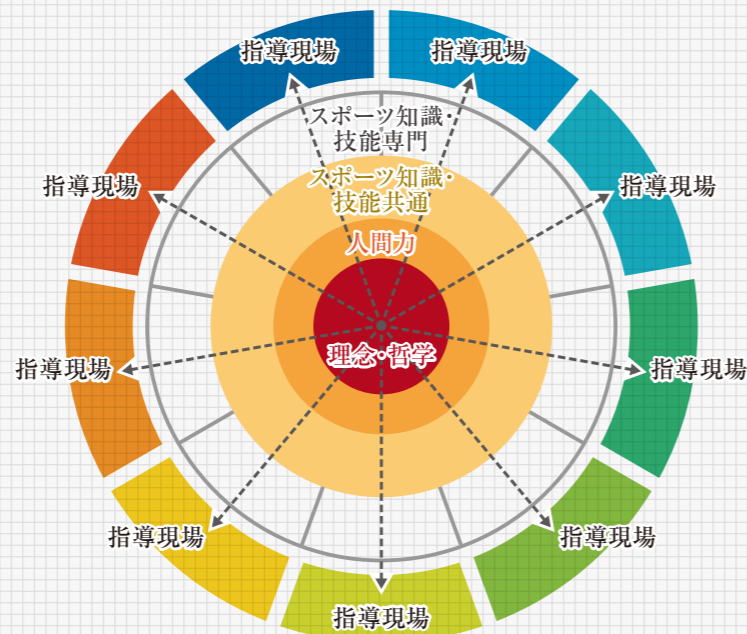
モデル・コア・カリキュラムとは、新しい時代にふさわしいコーチングを行うために、確実に習得すべき核となるカリキュラム(モデル・コア・カリキュラム)のことである。平成26年～27年度スポーツ庁委託事業『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成』事業(日本体育協会)ワーキンググループが中心となって作成された。

その作成手順は、①新しい時代にふさわしいスポーツ指導者(グッドコーチ)に求められる基本的資質を明確にした上で、②グッドコーチになるために確実に習得すべき内容を明らかにする、というプロセスを経た。

グッドコーチに求められる基本的資質を明確にするため、タスクフォース報告書のほか、全国体育系大学学長・学部長会がまとめた「体育・スポーツ学分野における教育の質保証」報告書や国際コーチングエクセレンス評議会(ICCE)による「スポーツコーチングに関する国際的枠組み」、日本体育協会公認スポーツ指導者養成講習会「共通科目カリキュラム」なども熟読し、グッドコーチの備えるべき基本的資質を抜き出した。

2-2 モデル・コア・カリキュラムの骨子

続いてワーキングでは、これらの文献から抽出し分類したキーワードが、一人の指導者(コーチ)の中でどのように形作られたときにより良い指導に結びついているかについて議論した。その結果、グッドコーチに求められる資質能力は、①自分自身のコーチングを形づくる中心にあるものとしての「思考(理念・哲学)」、②プレーヤーや社会との良好な関係を築くために必要な「態度・行動(人間力)」、③スポーツ指導を行ううえで必要となるスポーツ科学の「知識・技能」より構成されると想定した。



■図2-1. グッドコーチに求められる資質能力の概念図案(日本体育協会, 2015)

またこれらの関係は、図2-1に示すとおり、最も中心に心構えとなる思考(理念・哲学)があり、その外側に人間力(態度・行動)があり、そしてスポーツ指導に関する知識や技能が最も外側にあるという同心円の層構造を想定した。この知識・技能には、すべてのコーチに共通する知識・技能(スポーツ共通教養)に加えて、指導現場の特徴を反映させたより専門化された知識技能(専門教養)を備えるべきであると考えられた。

この概念図を基に学ぶべき内容の例を挙げたものが表2-1である。たとえば思考(理念・哲学)に高潔性を表す「インテグリティ」が示されており、またオリンピズムには「オリンピック・パラリンピック」が併記されている。東京2020を控え、新しい時代にふさわしいキーワードが網羅されていることが確認できる。最終報告書(日本体育協会, 2016)では、試行と議論を重ね、この骨子をさらに精錬化している。

■表2-1 モデル・コア・カリキュラムの骨子案(日本体育協会, 2015)

資質能力区分	学ぶべき内容の例(教育目標や到達目標に入るべきキーワード例)	現場で経験すべき内容
思考 (理念・哲学)	スポーツの意義と価値、スポーツ精神(スポーツマンシップ、フェアプレー)、倫理観、規範意識、プレーヤーズ・ファースト、暴力・ハラスメント根絶、ガバナンス、インテグリティ、オリンピズム(オリンピック・パラリンピック)、アンチ・ドーピング(理念)、コーチの役割と使命(職務)	コーチング実践と評価 指導計画、練習計画の作成(立案) コーチングの実際(個人・グループ) コーチングの実際(ゲーム) 観察・分析とアドバイス(個人の動き、ゲーム)
態度・行動 (人間力)	多様な思考法(複眼的思考、論理的思考、批判的思考)、課題発見・解決、セルフコントロール(メンタルマネジメント、アンガーマネジメント、レジリエンス、タイムマネジメント)、コーチのキャリアデザイン(コーチの成長過程、キャリアデザイン、ワークライフバランス)	プレゼンテーション ファシリテーション コーチングの評価 障がい者スポーツの体験
対他者 (人、社会)	人権、リスクマネジメント、言語・非言語コミュニケーション(観察、積極的傾聴と質問、プレゼンテーション、ファシリテーション)、プレーヤーを取り巻く人や組織等(アントラージュ)との関係構築、プレーヤー・チームのマネジメント(チームビルディング、プロモーション)、プレーヤーのキャリアデザイン(目標設定、長期的視点、デュアルキャリア)	
知識・技能 スポーツ 知識・技能	発達段階や技能レベルに応じた指導に関する知識・技能、外傷と障害の防止に関する知識・技能・特定のスポーツではなく競技横断的な知識・技能、指導計画立案・実践・評価、スポーツ活動を円滑に進めるために必要な知識・技能、(バイオメカニクス、生理学、解剖学、栄養学、医学、社会学、心理学、法学、哲学、倫理学、経営学、コーチング理論など)学校スポーツ、コミュニティ・スポーツ、トップスポーツ、障がい者スポーツ、女性とスポーツ、アンチ・ドーピング	
専門	競技特性・指導対象者特性に応じた知識・技能(競技の歴史・規定・規則、戦術、競技レベル、志向、年代・性別・障がい有無等に応じた指導法他)	

3. モデル・コア・カリキュラムに準じた授業科目の開講

3-1 授業の枠組み

平成26年～27年度スポーツ庁委託事業「コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成」事業（日本体育協会）において開発されたモデル・コア・カリキュラムに準拠して、体育系大学において授業科目を新設し、試行することが本事業の主たる目的であった。

大学において授業科目を開講するためには、カリキュラムポリシーとの対応を図る必要がある。そこで、全国体育系大学学長・学部長会がまとめた「体育・スポーツ学分野における教育の質保証」に記載された「参照基準」と照らし合わせたところ、以下のような対応関係が想定された。すなわち、中核にスポーツ指導における体罰・暴力の根絶といった理念やコーチング哲学を据え、それを取り巻くような形で「体育・スポーツ学の援用力（ジェネリックスキル）」（例：複眼的思考力、コミュニケーション力）を、そしてスポーツ指導に必修となる基礎的な知識（例：運動部活動における安全・事故防止対策、競技特性や生徒の発達段階に応じた適切な指導内容・方法）を周辺に配置するような、層構造のカリキュラムとして、想定することができた。

また、モデル・コア・カリキュラムは、様々な年代、様々な競技レベルにおけるコーチングを念頭に開発されており、その汎用性は高い。本学は、教員志望の学生が多く、運動部活動における指導法への展開が期待されることから、運動部指導におけるコーチングに特化した科目として試行することとした。

以上から、モデル・コア・カリキュラムの試行にあたり、授業科目は科目名を「運動部指導実践論」とし、以下の4つの内容で構成することとした。

- ① 運動部指導の理念と哲学
- ② 運動部指導者に求められる援用力
- ③ 運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識
- ④ 運動部指導における実践上の問題と対処法

3-2 「運動部指導実践論」の概要

以上の作業を経て、コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の試行として、大阪体育大学にて新規科目「運動部指導実践論」のシラバスを作成した（表3-1参照）。カリキュラム委員会での議論、教授会承認、学則変更を経て、平成28年度後期から大学2年生を対象に開講することとなった。

シラバスに示すとおり、本授業はオムニバス形式で全15回の講義を実施した。テキスト（教科書）には、「モデル・コア・カリキュラム」の趣旨を反映して編集された「運動部活動の理論と実践」（友添編著、大修館書店）を採用し、アクティブラーニングの教育手法を中心に展開された。

■ 表3-1. 運動部指導実践論シラバス

科目名	運動部指導実践論	担当教員	オムニバス	履修年次	2年	単位数	2単位
科目区分	関連科目	必修・選択の区分	選択	担当教員研究室	土屋裕陸研究室		
授業の概要	<p>本科目は、新しい時代にふさわしい運動部指導者育成のために新たに設置された科目である。日本体育学会および日本体育協会が作成する共通テキストを用いて、オムニバス授業あるいはEラーニングを導入して実施する。⑫～⑭運動部指導における実践上の問題と対処法では、運動部指導実習（教育実習やインターンシップ実習）、あるいは中体連・高体連、教育委員会の推薦するモデル校等での運動部見学をもとに、レポートを作成する予定である。</p>						
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ● スポーツ指導における暴力・ハラスメントの根絶の担い手となるため、運動部指導の基本的理念や哲学を学ぶ。 ● 運動部指導者に必要な実践力を身につけるため、体育・スポーツ学の援用力（人間力）を高める。 ● 運動部指導者に必修となる、スポーツ科学の基本的な知識、技能を身につける。 						
授業の進め方	<p>運動部活動の理論と実践にまつわるテキストを用いるが、「分かる」から「できる」を目指すため、グループディスカッションや問題解決学習等、アクティブラーニング（能動的学修）により授業を進める。単元によっては、その内容を論じるにふさわしい外部講師が講義を担当する場合がある。</p>						
受講上の注意	<p>⑫～⑭運動部指導における実践上の問題と対処法では、運動部指導実習（教育実習やインターンシップ実習）、あるいは中体連・高体連、教育委員会の推薦するモデル校での運動部見学をもとに、レポートを作成予定である。</p>						
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1) 運動部指導の理念と哲学：基本理念（学校教育における位置づけ、現代社会におけるスポーツの意義と価値、高潔性） 2) 運動部指導の理念と哲学：運営のあり方（生徒の自主性の尊重、効率的なマネジメント、中体連・高体連との関係） 3) 運動部指導の理念と哲学：暴力・ハラスメントの根絶、コンプライアンス（心理・社会的視点、法学的視点） 4) 運動部指導者に求められる援用力（人間力）：指導者としての成長、学び続ける姿勢 5) 運動部指導者に求められる援用力（人間力）：広範な知識と複眼的思考力、観察学習力、マネジメント力 6) 運動部指導者に求められる援用力（人間力）：内省、セルフコントロール（アンガーマネジメントを含む） 7) 運動部指導者に求められる援用力（人間力）：コミュニケーションスキルの向上（生徒、保護者、指導者間の連携） 8) 運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識：安全、事故防止、救急処置、スポーツ医・科学の知識の活用方法 9) 運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識：指導計画の立案方法、コーチングに必要なスポーツ科学の知識 10) 運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識：発育・発達段階に応じた指導、性・ジェンダーに配慮した指導 11) 運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識：競技特性に応じた指導、実技指導能力の向上 12) 運動部指導における実践上の問題と対処法：中学校で直面する問題を中心に 13) 運動部指導における実践上の問題と対処法：高等学校で直面する問題を中心に 14) 運動部指導における実践上の問題と対処法：競技力向上とアスリートファーストの両立 15) 運動部指導の自己点検・評価、レポートの提出とフィードバック 						
時間外学習指定教科書成績の基準	<p>運動部指導実習（教育実習やインターンシップ実習）、あるいは中体連・高体連、教育委員会の推薦するモデル校での運動部見学をもとに、レポートを作成する。</p> <p>友添秀則（編著）「運動部活動の理論と実践」、大修館書店（2016年8月発行）。</p> <p>授業への取り組みのほか、グループワークでの課題のできばえを総合的に判断する。</p>						

3-3 「運動部指導実践論」の実施

本事業では、講義用マニュアルならびに教材開発を行うこともねらいとしている。そこで、先に作成したシラバスに基づき、それぞれの単元を担当すべき講師に、モデル講義をお願いすることとした。具体的には、教科書として採用した「運動部活動の理論と実践」(友添編著、大修館書店)の執筆担当者に対して、本事業の趣旨を説明し、出講を依頼することとした。

その結果、ほぼすべての執筆者が本事業の趣旨を理解し、出講の依頼に応じてくれた。しかしながら、日程調整が難航し、すべての依頼受諾者に出講いただくことは叶わなかった。また、授業の枠組みで述べたように、シラバスでは、モデル・コア・カリキュラムに準じて、その学びの中核である理念・哲学から講義を始めることを念頭においていた。したがって、「運動部指導実践論」では、①運動部指導の理念と哲学、②運動部指導者に求められる援用力、③運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識、④運動部指導における実践上の問題と対処法の順で学びを深めることになっていた。しかし、外部講師との日程調整の結果、一部ではその順序が入れ替えて実施された場合があった。なお、受講生には予めそのことを伝え、体系を意識しながら知識を整理するよう依頼した。

以下に、全15回の講義の実施状況を示す。

第1回[9/21] 「ガイダンス」 講師名:土屋裕陸(大阪体育大学)

本講義では、授業の概要についてガイダンス(授業開設の趣旨、アクティブラーニングを用いること、他)を行った後、体罰経験等を尋ねる「授業前調査アンケート」に回答を求めた。

第2回[9/28] 「事前レポートの作成」 講師名:土屋裕陸(大阪体育大学)

本講義では本授業が反転学習を重要視していることを強調し、自宅学習として指定教科書を基にレポート課題を作成するよう指示を行った。

第3回[10/5] 「運動部指導の理念と哲学:基本理念(学校教育における位置づけ、現代社会におけるスポーツの意義と価値、高潔性)」 講師名:土屋裕陸(大阪体育大学)

本講義では、「授業前調査アンケート」の速報結果を報告しながら、体罰に関するロールプレイ、スポーツの価値、グッドコーチの条件を考えるグループディスカッションを行った。

第4回[10/12] 「運動部指導の理念と哲学:運営の在り方(生徒の自主性の尊重、効率的なマネジメント、中体連・高体連との関係)」 講師名:池上正(京都サンガ)

本講義では、学校運動部活動の運営の仕方や生徒の自主性を育てる指導法について、それぞれの考えをシェアしながら進められた。

第5回[10/19] 「運動部指導者に求められる援用力(人間力):指導者としての成長、学び続ける姿勢」 講師名:伊藤雅充(日本体育大学)

本講義では、過去に受けてきたコーチングと理想とするコーチングを明確にし、理想のコーチングを実践するには何が足りていないか、どうすればそのスキルが身につくかなどについて、学生同士で考えをシェアした。

第6回[10/26] 「運動部指導者に求められる援用力(人間力):広範な知識と複眼的思考力、観察学習力。マネジメント力」 講師名:吉田浩之(群馬大学)

本講義では、目標設定に実際に取り組みながら、運動部指導者に求められる援用力(人間力)を確認し、広範な知識と複眼的思考力の必要性を理解した。

第7回[11/2] 「運動指導の理念と哲学:暴力・ハラスメントの根絶、コンプライアンス」 講師名:西島央(首都大学東京)

本講義では、運動部活動の意義と社会的役割を教育社会学の観点から論じ、受講生は、中学生の部活動への期待に関する調査データを踏まえ、指導者はどうあるべきかを考えた。

第8回[11/16] 「運動部指導における実践上の問題と対処法:中学校や高等学校の現場で直面する問題を中心に」 講師名:中小路徹(朝日新聞社)

本講義では、運動部指導における実践上の問題と対処法を学ぶため、中学校や高等学校の現場で直面する問題を中心に、実際に起こった事故等に関わる報道資料を基に、対応法の実例を学んだ。

第9回[11/30] 「運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識:競技特性に応じた指導、実技指導能力の向上」 講師名:嶋崎雅規(国際武道大学)

本講義では、講師の体験に基づき、教師の日常を披露し、その中で運動部指導の果たす重要性、役割を理解し、生徒主体の運動部活動のあり方について、グループ討議を通じて検討した。

第10回[12/7] 「運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識:安全、事故防止、救急処置、スポーツ医・科学の知識の活用方法」 講師名:南部さおり(日本体育大学)

本講義では、運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識のうち、スポーツ医・科学の知識の活用方法に焦点をあて、安全、事故防止、救急処置の最新情報について学んだ。

第11回[12/14] 「運動部指導者に求められる援用力(人間力):内省、セルフコントロール(アンガーマネジメントを含む)」 講師名:洪倉崇行(桐蔭横浜大学)

本講義では運動部指導者に求められる援用力(人間力)のうち、特にアンガーマネジメントを取り上げ、怒りの感情が発生するメカニズムや、その感情との付き合い方について具体的な技法を学んだ。

第12回[12/21] 「運動部指導者に求められる援用力(人間力):コミュニケーションスキルの向上(生徒、保護者、指導者間の連携)」 講師名:岡達生(日本体育協会)

本講義では、コミュニケーションスキルに着目し、ケースメソッドを用いて、身近な事例(インターハイ予選登録メンバーを決める)を基にエクササイズを行い、良いコミュニケーションと不十分なコミュニケーションを体験し理解を深めた。

4. 「モデル・コア・カリキュラム」試行の効果

第13回 [1/11] 「運動部指導における実践上の問題と対処法：ジュニアスポーツの指導場面での倫理的問題」 講師名：友添秀則（早稲田大学）

本講義では、運動部指導における実践上の問題と対処法として、ジュニアスポーツからトップアスリートにいたる様々なコーチング場面での倫理的問題について理解を深めた。

第14回 [1/18] 「運動部指導における実践上の問題と対処法：競技力向上とアスリートファーストの両立」 講師名：土屋裕陸（大阪体育大学）

本講義では、授業全体のまとめとして各講義の要点のレビューを行い、グッドコーチになるための必要条件（学び続けることの大切さ、他）を確認した。

第15回 [1/25] 「運動部指導の自己点検・評価、レポートの提出とフィードバック、試験」 講師名：土屋裕陸（大阪体育大学）

本講義では、試験を通じて本授業で学んだ知識を確認した。その後、コーチング実習ならびに教育実習時における部活動指導の見学や指導補助において、本授業で学んだ知識や技能をどのように発揮したかを記入するよう求めた。

4-1 調査目的と内容、方法

ここでは、授業の前後にアンケート調査を実施し、体育系大学に所属する学生の運動部活動における体罰・暴力の経験や意識を把握するとともに、「運動部指導実践論」の実施により当該学生の体罰・暴力の意識の変化について検討することとした。アンケートの質問項目および集計方法は、全国大学体育連合（2014）の「運動部活動等における体罰・暴力に関する調査報告書」を参考にした。具体的には、以下のような事項について尋ねている。詳しくは、資料4-1および資料4-2を参照していただきたい。

授業受講前の調査アンケート

受講生のフェイスシートの他、以下の項目について尋ね回答を得た。

- Q1. 受講生の考える体罰・暴力（ハラスメント）の内容
- Q2. 受講生の各年代における体罰・暴力を受けた経験・頻度
- Q3. 一番多く体罰を受けた時期における体罰の回数
- Q4. 体罰・暴力の理由（自由記述）
- Q5. 体罰・暴力の影響
- Q6. 状況別に見た体罰・暴力の容認度
- Q7. 運動部指導者希望の度合い
- Q8. 体罰・暴力に対する正しい理解度に関する自己評価
- Q9. 運動部指導における体罰・暴力に関する意見

授業受講後の調査アンケート

授業受講前調査アンケート（Pre）と同様、受講生のフェイスシートの他、以下の項目について尋ね、回答を得た。なお、Q1～Q5までは授業受講前調査アンケートと同様の項目を用意しており（Preに項目対応を示した）、授業受講前後で得点の変化が認められるか、すなわち体罰根絶意識が明確になるかどうかを確認しようと試みている。

なお、Q6において別途「かつての指導者に対する信頼感や親近感」を尋ねている意図は、たとえ本授業を通じて自身が受けた体罰経験を否定したとしても、かつての指導者や自身のスポーツ経験全般については肯定感や受容感が維持されることが望ましいと考えられ、それを確かめるための項目である。

- Q1. 受講生の考える体罰・暴力（ハラスメント）の内容（Pre:Q1.）
- Q2. 体罰・暴力の影響（Pre:Q5.）
- Q3. 状況別に見た体罰・暴力の容認度（Pre:Q6.）
- Q4. 運動部指導者希望の度合い（Pre:Q7.）
- Q5. 体罰・暴力に対する正しい理解度に関する自己評価（Pre:Q8.）
- Q6. かつての指導者に対する信頼感や親近感

1	3	学籍 番号						成年 月日			日		
科目							日付			時限	氏名		

運動部活動における指導についての調査

この調査は、運動部活動における指導についての意識を問うものです。得られたデータはすべて統計的に処理されます。個人情報の取り扱いには厳重に行いますので、ご迷惑おかけすることは決してございません。ご協力いただける場合、下記にご記入いただき、Q1～8の各問にご回答(番号に○印を付ける)をお願いいたします。

◆所属運動部:()部 学年・年齢:() 回生:()歳

Q1. 以下の事柄で、運動部指導において体罰・暴力(ハラスメント)と考えられるものはどれですか。(複数回答可)

- 1. 道具を投げつける
- 2. 頭を平手ではたく
- 3. ミスを繰り返す選手を罰として走らせる
- 4. 丸刈りを強いる
- 5. 長時間の正座
- 6. 容姿・体形をからかったり冗談を言ったりする
- 7. ~しないなら試合に出さないと言う

Q2. 現在または過去の学校期において運動部活動中に体罰・暴力(ハラスメント)を振るわれたことがありますか。各学校期で、活動していた種目と体罰・暴力の頻度について当てはまる数字に○をつけて回答してください。

- ①小学校時代(種目:)
 - 1. ほぼ毎日
 - 2. 週に2~3回
 - 3. 月に1回
 - 4. 数か月に1回
 - 5. 受けなかった
- ②中学校時代(種目:)
 - 1. ほぼ毎日
 - 2. 週に2~3回
 - 3. 月に1回
 - 4. 数か月に1回
 - 5. 受けなかった
- ③高校時代(種目:)
 - 1. ほぼ毎日
 - 2. 週に2~3回
 - 3. 月に1回
 - 4. 数か月に1回
 - 5. 受けなかった
- ④大学(種目:)
 - 1. ほぼ毎日
 - 2. 週に2~3回
 - 3. 月に1回
 - 4. 数か月に1回
 - 5. 受けなかった

Q3. 一番体罰が多かった時期で、1回に行われる体罰・暴力の回数ほどの程度でしたか。

- 1. 1回
- 2. 2~3回
- 3. 4~6回
- 4. 10回以上
- 5. 体罰・暴力を受けたことがない

Q4. 体罰・暴力に至る主な理由は何でしたか(何だと思えますか)。(自由記述)

- ①
- ②
- ③

処理

評価

Q5. 体罰・暴力を受けたことによって、あなたはその後どうなりましたか。(複数回答可)

- 1. 精神的に強くなった
- 2. 技術が向上した
- 3. 指導者の気持ちがわかった
- 4. プレーが委縮した
- 5. 体罰・暴力を受けることが不安になった
- 6. 試合に勝てるようになった
- 7. 反抗心を持った
- 8. 受けたことがないので分からない

Q6. 運動部の指導上、体罰が必要な場合とは、どんな場合だと思いますか。

以下のような場合に、体罰を与えたとしたらそれはどの程度「必要」であると考えますか。それぞれ、最も当てはまると思う数字に○をつけて回答してください。

	全く必要でない			非常に必要である		
	1	2	3	4	5	6
1. 練習などで指導者の言うことを聞かなかった場合	1	2	3	4	5	6
2. 危険行為をした場合	1	2	3	4	5	6
3. ミスをした場合	1	2	3	4	5	6
4. ミスを繰り返した場合	1	2	3	4	5	6
5. 同じミスを繰り返した場合	1	2	3	4	5	6
6. 無気力なプレーをした場合	1	2	3	4	5	6
7. 試合に負けた場合	1	2	3	4	5	6
8. 練習や試合に遅刻した場合	1	2	3	4	5	6
9. 練習や試合に欠席した場合	1	2	3	4	5	6
10. 遅刻や欠席の理由が不可避ではない場合	1	2	3	4	5	6
11. プレーが上達しない場合	1	2	3	4	5	6
12. 礼節が守れない場合	1	2	3	4	5	6
13. チームの規律を乱した場合	1	2	3	4	5	6
14. 日常生活で不適切行為があった場合	1	2	3	4	5	6

Q7. あなたは将来、運動部活動等のスポーツ指導者になりたいと思えますか。

- 1. 全くそう思わない
- 2. あまり思わない
- 3. そう思う
- 4. 強くそう思う

Q8. あなたは運動部指導における体罰・暴力についてどれくらい正しい理解を持っていると思えますか。

- 1. 全くそう思わない
- 2. あまり思わない
- 3. そう思う
- 4. 強くそう思う

Q9. 運動部指導における体罰・暴力について、率直な質問や疑問があれば自由に書いてください。

以上で終了です。ご協力ありがとうございました。

運動部活動における指導についての調査

この調査は、運動部活動における指導についての意識を問うものです。得られたデータはすべて統計的に処理されます。個人情報の取り扱いには厳重に行いますので、ご迷惑おかけすることは決まていません。ご協力いただける場合、下記にご記入いただき、Q1～6の各問にご回答(番号に○印を付ける)をお願いいたします。

Q1. 以下の事柄で、運動部指導において体罰・暴力(ハラスメント)と考えられるものはどれですか。(複数回答可)

- 1. 道具を投げつける
- 2. 頭を平手ではたく
- 3. ミスを繰り返す選手を罰として走らせる
- 4. 丸刈りを強いる
- 5. 長時間の正座
- 6. 容姿・体形をからかったり冗談を言ったりする
- 7. ~しないなら試合に出さないと言う

Q2. 体罰・暴力を受けたことによって、あなたはその後どうなりましたか。(複数回答可)

- 1. 精神的に強くなった。
- 2. 技術が向上した。
- 3. 指導者の気持ちがわかった。
- 4. プレーが委縮した。
- 5. 体罰・暴力を受けることが不安になった。
- 6. 試合に勝てるようになった。
- 7. 反抗心を持った。
- 8. 受けたことがないので分からない。

Q3. 運動部の指導上、体罰が必要な場合とは、どんな場合だと思いますか。

以下のような場合に、体罰を与えたとしたら、それはどの程度「必要」であると考えますか。それぞれ、最も当てはまると思う数字に○をつけて回答してください。

	全く必要でない					非常に必要である						
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
1. 練習などで指導者の言うことを聞かなかった場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
2. 危険行為をした場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
3. ミスをした場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
4. ミスを繰り返した場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
5. 同じミスを繰り返した場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
6. 無気力なプレーをした場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
7. 試合に負けた場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
8. 練習や試合に遅刻した場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
9. 練習や試合に欠席した場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
10. 遅刻や欠席の理由が不可避ではない場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
11. プレーが上達しない場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
12. 礼節が守れない場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
13. チームの規律を乱した場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
14. 日常生活で不適切行為があった場合	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6

Q4. あなたは将来、運動部活動等のスポーツ指導者になりたいと思いますか。

- 1. 全くそう思わない
- 2. あまり思わない
- 3. そう思う
- 4. 強くそう思う

Q5. あなたは運動部指導における体罰・暴力について正しい理解を持っていると思いますか。

- 1. 全くそう思わない
- 2. あまり思わない
- 3. そう思う
- 4. 強くそう思う

Q6. あなたは、本授業を受ける前と後で、かつての指導者に対する信頼感や親近感が低くなりましたか。

- 1. 全くそう思わない
- 2. あまり思わない
- 3. そう思う
- 4. 強くそう思う

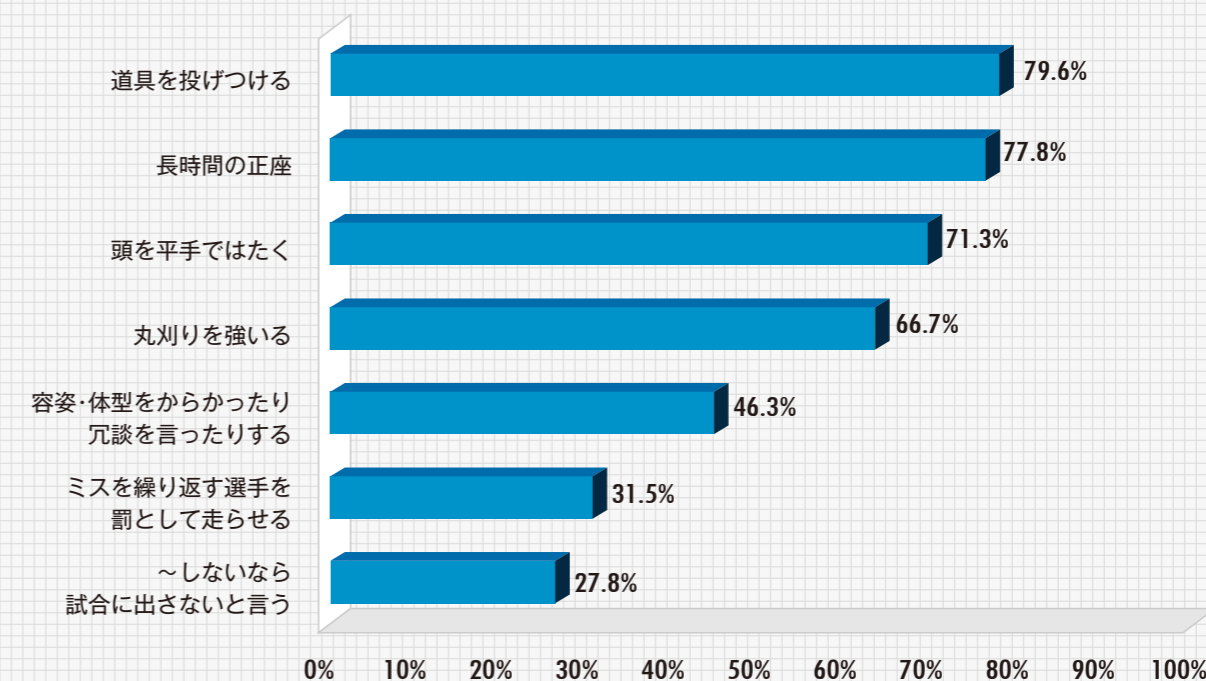
4-2 受講前調査の結果:体罰・暴力指導の実態

「運動部指導実践論」を履修した大学2年生113名(男性74名・女性39名)に対し、授業受講前と授業受講後に体罰・暴力に関するアンケート(資料4-1および資料4-2参照)を配布し、回答を得た。2回の調査のうち、いずれかの調査に無回答であった7名の男子がデータには含まれていた。そのため、授業前調査・授業後調査の有効回答数は、それぞれn=109、n=110であった。また、授業効果について、先述した7名のデータを分析から除外した(有効回答数、n=106)。以下、それぞれの結果について順に述べる。

①体罰・暴力(ハラスメント)と考えられる行為

「運動部指導において体罰・暴力(ハラスメント)と考えられるもの」について複数回答で尋ね、集計の結果を図4-1に示した。その結果、「道具を投げつける」、「長時間の正座」、「頭を平手ではたく」について、90%以上の学生が体罰・暴力(ハラスメント)であると認識しており、次いで「丸刈りを強いる」も78%の学生が体罰・暴力(ハラスメント)と認識していた。一方で、「~しないなら試合に出さないと言う」や「ミスを繰り返す」については38.5%であり、体罰・暴力(ハラスメント)であると認識している学生は少なかった。

体罰・暴力(ハラスメント)に対する意識が高まってきてはいるが、「頭を平手ではたく」のような典型的な体罰ですら、体罰とは認めない受講生のいること、また言葉の暴力や丸刈りの強制については暴力・ハラスメントと捉えにくい実態のあることが浮き彫りになっている。



■図4-1.体罰・暴力(ハラスメント)と考えられる指導者の行為

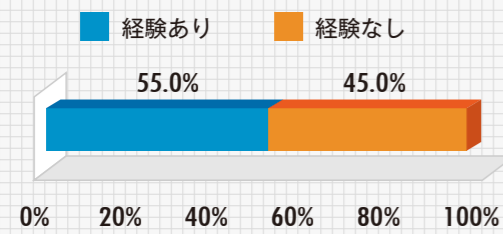
② 体罰経験の有無

「現在または過去の学校期において運動部活動中に体罰・暴力(ハラスメント)を振るわれたことがあるか」を、①小学校時代、②中学校時代、③高校時代以降の各学校期に分けて、頻度(ほぼ毎日、週に2~3回、月に1回、数ヶ月に1回、受けなかった)を尋ねた。

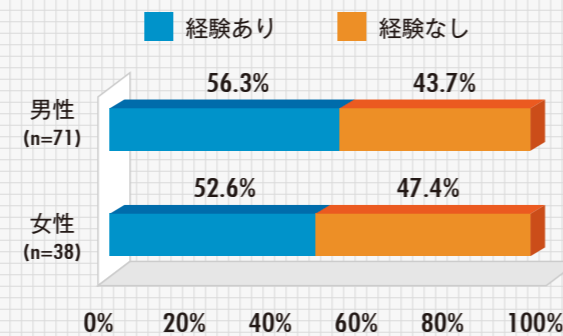
①~③の学校期において体罰を受けなかったと回答した学生を「体罰経験なし」、①~③の学校期において1度でも体罰を受けた(ほぼ毎日、週に2~3回、数ヶ月に1回)と回答した学生を「体罰経験あり」として集計を行い、結果を以下の図に示した。

図4-2より、体罰経験がある学生の割合が55.0%であり、過半数の学生に体罰経験があることがわかった。全国大学体育連合(2014)は、運動部に所属経験のある体育学部の学生1074名とそうでない学生2883名を対象に同様の調査を行った。その結果、一般学生群で体罰経験があると答えた学生は11.9%であり、体育系専攻学生群で体罰経験があると答えた学生は31.2%であった。この調査では、一般学生群と比較して体育系専攻学生群の体罰経験の割合の高いことが示されており、今回の結果もそれを裏づけるものであろう。

また、今回受講生を対象とした本調査の結果は、全国大学体育連合の体育系専攻学生を対象とした調査の結果をも大きく上回る結果であった。その理由は、より詳細かつ厳密に実態に迫るため、調査アンケートにおいて、年代ごとに詳細に体罰経験を尋ね、一度でもそれが確認されれば体罰経験「有」群に分類したことによると考えられる。



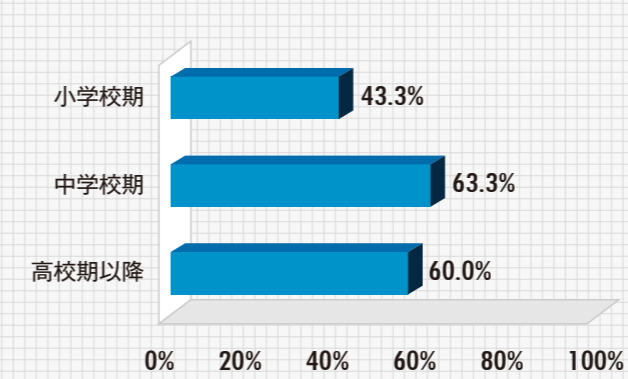
■ 図4-2. 体罰経験の有無 (n=109)



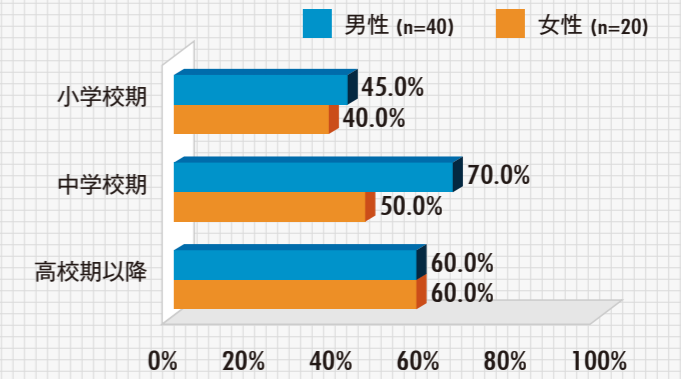
■ 図4-3. 体罰経験の有無(男女別)

③ 体罰を受けた学校期

上記②の質問に対する回答について各学校期別に集計を行った。以下の図4-4は全体の集計結果、図4-5は男女別の集計結果を示したものである。男女差(あるいは種目差)のあることが想定された。



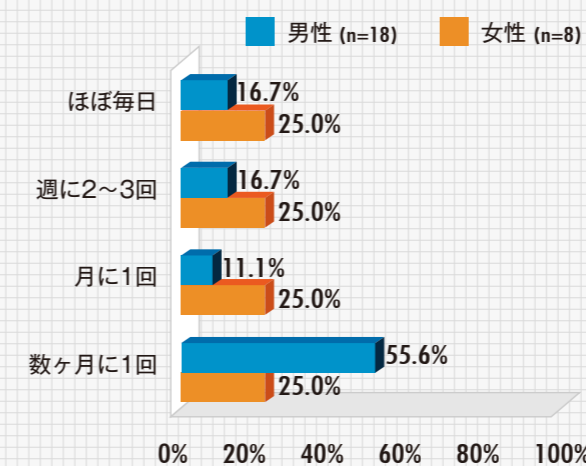
■ 図4-4. 体罰を受けた学校期 (n=60)



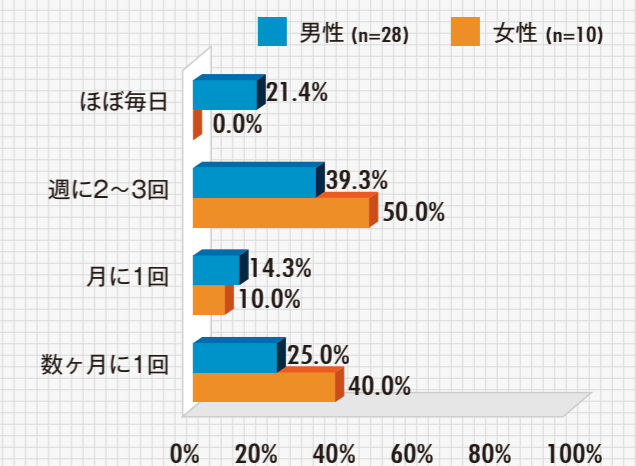
■ 図4-5. 体罰を受けた学校期(男女別)

④ 各学校期における体罰の頻度

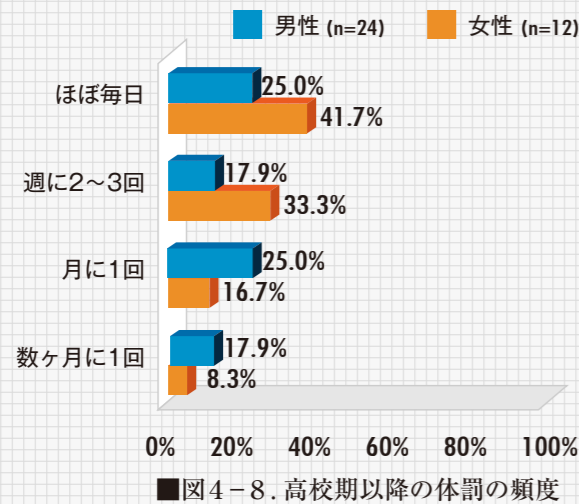
次に、②の質問に対する回答について、体罰の頻度を各学校期・男女別に示した(図4-6~図4-9)。中学校期・高校期以降において「ほぼ毎日」あるいは「週に2~3回」体罰を受けたと報告する割合が一定数認められ、指導の一環として体罰が用いられている実態が明らかになった。このことは、全国体育連合の調査結果(2014)においても指摘されており、この問題の根深さが垣間見える。



■ 図4-6. 小学校期の体罰の頻度

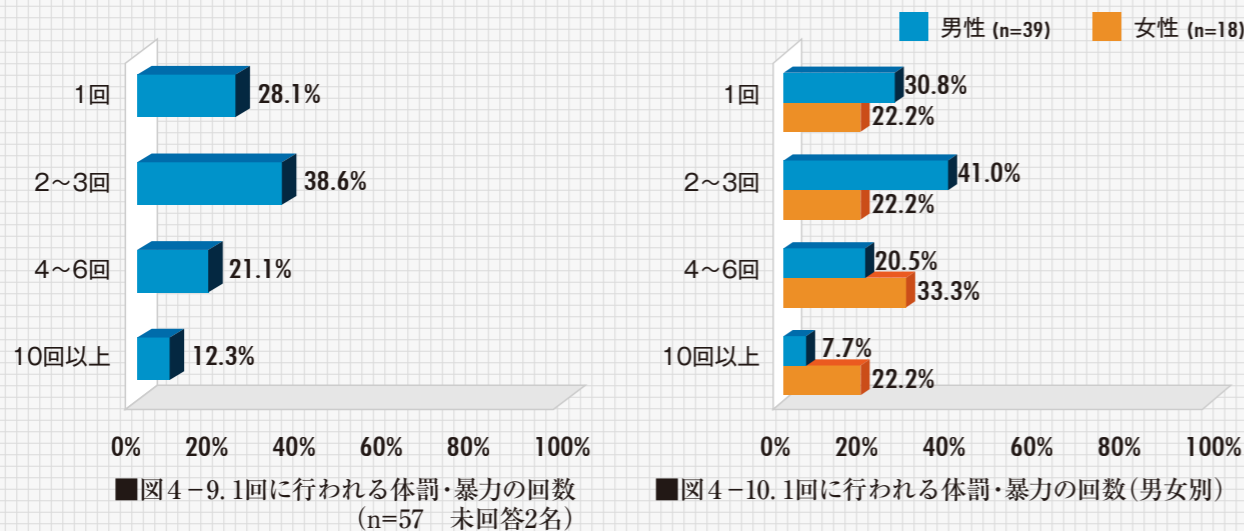


■ 図4-7. 中学期の体罰の頻度



⑤1回に行われる体罰・暴力の回数

「1回に行われる体罰の回数」について尋ねた(1回、2~3回、4~6回、10回以上、体罰・暴力を受けたことがない)。以下の図4-9は全体の集計結果、図4-10は男女別の集計結果を示したものである。図4-9より、全体的に1回に行われる体罰の回数は「2~3回」が最も多かった。男女別に見ると、男性は「2~3回」が最も多く、女性は「4~6回」が最も多かった(図4-10)。全国大学体育連合の調査では、男女ともに「2~3回」が最も高い割合であったが、本調査ではここでも性差が認められ、女子学生への体罰回数の多さは看過できないと思われる。



以上から、本授業の履修者も、かつて体罰を受けたことのある者が半数程度はいることが分かった。一般に体罰・暴力を受けた経験のある体育系学生の場合、スポーツ指導においては体罰・暴力を含む「厳しい指導」は必要であると認識している場合が多く、将来自身も指導者になった場合に、状況によっては体罰・暴力指導を行うかも知れないと考えていることが指摘されている。本事業では、本節で示した受講生の体験の特徴を踏まえ、体罰・暴力(ハラスメント)と、競技力向上に必要な「厳しい指導」とは別物であることを繰り返し伝えながら、グッドコーチを目指せるようアクティブラーニングを取り入れた「運動部指導実践論」を展開した。その効果を次節にて検証する。

4-3 受講後調査の結果:モデル・コア・カリキュラム試行の効果

次に、授業の効果を検討するため、以下の項目について授業前と授業後の得点を比較した。分析は対応のあるt検定で行い、有意水準を1%とした。

①体罰・暴力が必要と思われる場合とその程度

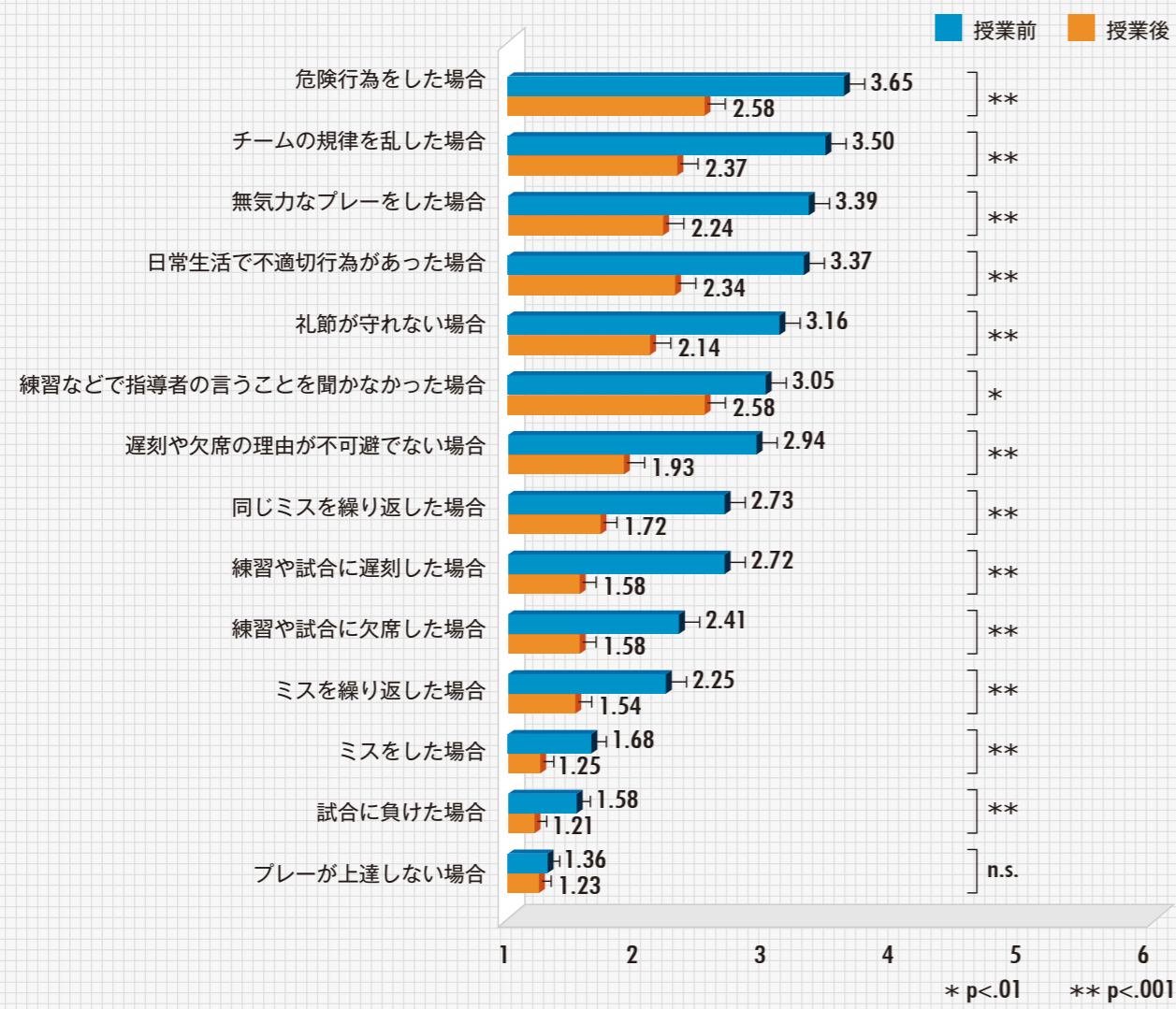
運動部活動中に起こりうるいくつかの場合について体罰はどの程度必要かを、6件法(1:全く必要でない~6:非常に必要である)で尋ねたところ、授業前から授業後にかけて全ての項目で得点が低下していた。検定を行った結果、もともと得点が1点台であった「プレーが上達しない場合」の項目を除いて、全ての項目で有意な差が認められた(表4-1)。このことは、運動部指導実践論を通じて、体罰・暴力(ハラスメント)根絶の意識が向上したことを示している。

また図4-11を見ても明らかのように、授業前に3点台を示していた項目(危険行為をした場合、チームの規律を乱した場合)は、従来体罰指導が起こりやすい場面であった。しかし受講後はいずれも、平均値が1点台あるいは2点台に低下しており、このような事態でも体罰が不要であるという認識が身につけていることが確認された。

表4-1. 授業前と授業後の得点の比較

	授業前		授業後		t値	
	M	SD	M	SD		
危険行為をした場合	3.65	2.36	2.58	1.92	7.11	**
チームの規律を乱した場合	3.50	2.18	2.37	1.78	7.61	**
無気力なプレーをした場合	3.39	2.03	2.24	1.63	7.23	**
日常生活で不適切行為があった場合	3.37	2.16	2.34	1.79	6.32	**
礼節が守れない場合	3.16	2.29	2.14	1.55	6.69	**
練習などで指導者の言うことを聞かなかった場合	3.05	1.99	2.58	1.92	3.11	*
遅刻や欠席の理由が不可避でない場合	2.94	2.21	1.93	1.36	6.18	**
同じミスを繰り返した場合	2.73	2.07	1.72	0.80	6.95	**
練習や試合に遅刻した場合	2.72	1.96	1.58	0.88	7.54	**
練習や試合に欠席した場合	2.41	1.92	1.58	0.88	5.95	**
ミスを繰り返した場合	2.25	1.58	1.54	0.63	5.69	**
ミスをした場合	1.68	0.85	1.25	0.32	4.62	**
試合に負けた場合	1.58	0.80	1.21	0.34	4.05	**
プレーが上達しない場合	1.36	0.46	1.23	0.39	1.93	n.s.

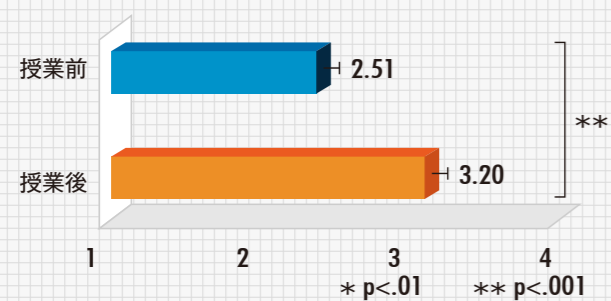
* p<.01 ** p<.001



■図4-11. 体罰が必要と思われる場合とその程度

② 運動部指導の体罰・暴力について正しい理解を持っているか

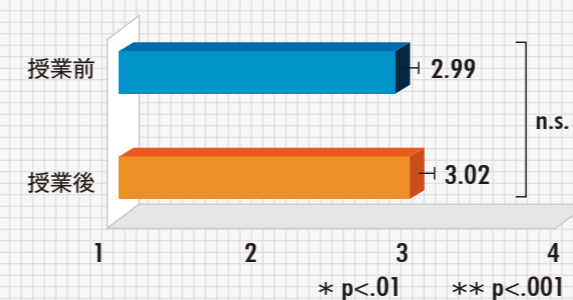
運動部指導の体罰・暴力について正しい理解を持っているかについて、4件法（1：全くそう思わない～4：強くそう思う）で尋ねたところ、授業開始前から授業終了後にかけて得点が向上していた。対応のあるt検定を行った結果、有意な得点の増加が認められた（ $t(105) = 10.63, p < .01$ ）。先の調査では体罰が不要であるとの意識が高まっており、その認識が正しいと自信を持って回答していることが伺える。



■図4-12. 運動部指導の体罰・暴力についての理解度

③ 将来運動部活動等の指導者になりたいか

「将来運動部活動等の指導者になりたいか」について、4件法（1：全くそう思わない～4：強くそう思う）で尋ねた。対応のあるt検定を行った結果、授業開始前と授業終了後の得点に有意な差は認められなかった（ $t(105) = 0.54, n.s.$ ）。体罰のようなネガティブな事象に焦点を当てた講義を受講しても、指導者を目指す意欲が維持されていることが確認された。

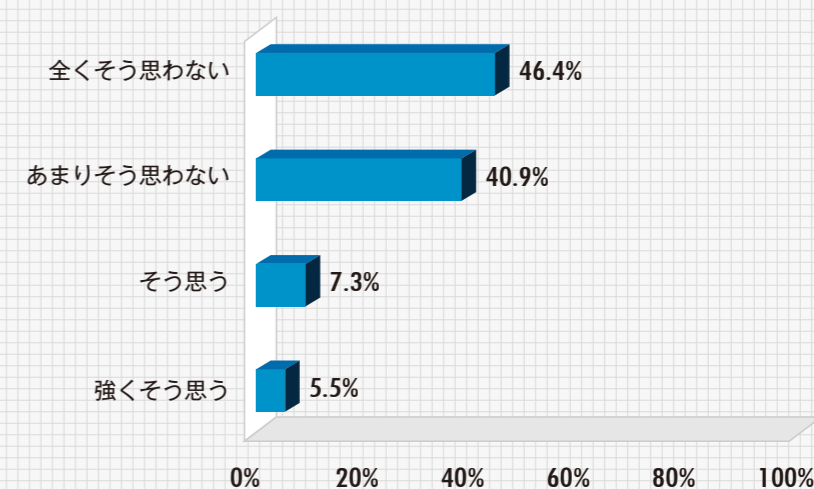


■図4-13. 将来運動部活動等の指導者になりたいか

④ 授業を受ける前と後でかつての指導者に対する信頼感や親近感は低下したか

「授業を受ける前と後でかつての指導者に対する信頼感や親近感は低くなったか」について、4件法（1：全くそう思わない～4：強くそう思う）で尋ねたところ、かつての指導者に対する信頼感や親近感は低下しなかったと回答した学生は、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」の回答者を合わせると、全体の87.3%であった（図4-14）。

この質問の意図は、たとえ本授業を通じて自身が受けた体罰経験を否定したとしても、かつての指導者や自身のスポーツ経験全般については肯定感や受容感が維持されることが望ましいと考えられ、それを確かめるための項目であった。



■図4-14. 授業を受ける前と後でかつての指導者に対する信頼感や親近感は低くなったか

調査全体を眺めてみると、①体罰が不要と思われる場面が増え、②体罰に対する正しい知識を身につけたと考える一方で、③指導者になることへの希望も④かつての指導者に対する信頼感や親近感も、ともに維持されていることが確認された。

4-4 受講生の学びの具体例

授業終了後、受講生に対して「運動部指導実践論を受講して新しく学んだことを5つ」について自由に記述してもらった。それらの記述をKJ法により分類した結果、以下の6つのカテゴリーが抽出された。以下では、学生のコメントから一部抜粋しながら、受講生の学びの具体例を示した。

① 体罰根絶に向けた意識の高まり

「体罰がどれだけダメなことか。将来が有望な選手でも指導者の指導方法一つでダメになっていく選手が何人もいる。体罰をするのではなく、しっかり言葉で説明する指導をしてあげることの大切さを学んだ」(男性)

「大きく意識が変化したのは高校で体罰があり、それが当たり前であって強くなるためには必要不可欠だと思っていた。しかし、この授業を受け、体罰がなくても成長させることは可能であり、自分より力を持っている仲間も体罰がなくても成長できたというのを知り、選手を成長させるのは個人の努力もあるけれど指導者の技量だと思った」(女性)

「最初は自分も体罰を受けてきた身なので多少の体罰はいいと思っていた(罰として走らせることも、体罰に入るということを知らなかったからだ)。そういう考えの人が多から、このような体罰問題が出てくるのだと思う。この授業を受けて、体罰がなくてもチームを強くする方法があるということがわかった」(女性)

② グッドコーチを目指す決意

「この授業を通して思ったのは、指導者の大切さだ。体罰やハラスメント、部活動での事故、これらは全て指導者の責任になる。良い指導者とは何なのかを毎回考えさせられ、何が正解なのか正直分からぬ。ただ、生徒から信頼される指導者になりたいと思った」(男性)

「グッドコーチになるために必要な資質として暴力・ハラスメントの根絶に全力を尽くすことや、自らの人間力を高めたり、学び続ける姿勢が今後の自分に必要だと思った」(男性)

「グッドコーチに向けた7つの提言は、コーチである前にまず人としてどうあるべきかという姿もあらわしており、みな1度目を通すと良いと思う。この7つの中でも『常に学び続けましょう』が非常に良いと思った。特にスポーツマンは、これまでの自分の経験や成功体験に自信があるとそれが絶対であり学ぼうとしないため、そこから体罰や間違った指導に繋がると思う。だから学ぶことは大切だと思う」(女性)

③ 運動部指導への期待と不安

「なんでもかんでも根性論でどうかなると思ってはいけない。病気をしても気合いで～や、怪我をしても我慢すれば～ではなく、生徒が先生に言いやすい相談しやすい環境を作ることが大切である」(女性)

「これから教育実習に行くが、生徒の目線に立ち物事を考える。教える立場になったからといって物事を上から捉えるのではなく、同じ目線に立って考える」(女性)

「熱のこもった指導と体罰は紙一重であり、とても難しいので、指導者には選手からの信頼、選手一人一人の理解をすることが一番良い指導じゃないのかなとこの授業を受けて感じた」(男性)

④ 安全への配慮・事故対応への意識の高まり

「この授業では、安全に対する知識の大切さを学びました。指導者として生徒が安全にスポーツをできるようにきちんと安全等に対する知識を持っておかなければいけないと学びました。また脳震盪の怖さもわかってこれから気をつけようと思いました」(女性、)

「これまで部活で頭を打った人が休んだり、体調悪い人が休んだりすることがズルだ!とか思ってしまっただけ、そういうことは気持ちでどうかなるものではなく健康な体に危険が迫ることもある」(男性)

「熱中症や脳震盪に対する考えが大きく変わった。正直熱中症や脳震盪は死とつながっているとはあまり思っていなかったが、様々な事例を見て大変なことだということを知った」(男性)

⑤ アンガーマネジメントの活用

「私も後輩にイライラしたりすることがあるように指導者になってからも、そのようなことは必ず起こると考えられる。その際に怒りに任せてしまうと良い指導ができないと思うので、アンガーマネジメントは大切だと思った」(男性)

「べきに対する考え方。この話を聞いて怒りそうになった時にまず自分の中にあるべきは正しいのかどうかを判断する。次に相手の事を考え、何かあったんだから仕方ないなと理由があるかもしれないのでむやみに怒らない」(男性)

「イラっときても何秒か待つことや、考える視点を変えることで自分とは考え方が違うんだと解決できるかもしれないし、自分のストレスにもなりにくいと思う。人と付き合っていく中で絶対ないとは言えないのでこの方法を活用してみようと思った」(女性)

⑥ 目標設定の重要性

「目標を立てる法則を学んだことがなかったので、講義の後から自分を見直してもう一度目標を立て直すことができた。目標に一步近づけた気がする1時間半だった」(男性)

「強いチームをつくろうと思うのであれば、目標を定めさせ、そのために自分が今やるべきこと、1週間後、1ヶ月後どうあるべきかなどを明確にさせ、自分自身のイメージをクリアにさせておくことが重要だと知った」(女性)

「選手の〇〇という目標に対して、それに導く目標設定の仕方を指導することが大切である。じゃあどうする?をテーマに〇〇するために〇〇するといった目標の立て方を教えるようになると良い」

5. 事業実績のまとめ

5-1 コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」試行の成果

コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」試行の結果を検討するため、本事業では、大阪体育大学において「運動部指導実践論」を新規で開講することとした。モデル・コア・カリキュラムに準拠して、「運動部指導実践論」は①運動部指導の理念と哲学、②運動部指導者に求められる援用力、③運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識、④運動部指導における実践上の問題と対処法から構成するものとした。本科目は、モデル・コア・カリキュラムの趣旨を十分反映させて作成されたことから、体育系大学あるいは教育系大学において、半期15回で実施する科目の1つの試行例(サンプル)になると考えられる。

授業開始前と授業終了後に「運動部活動における指導についての調査」を実施した。授業前調査の結果からは、約半数の受講生に体罰を受けた経験のあることが分かり、この問題の根深さが露見された。そのような受講生の実態を意識しながら、授業を展開し、受講後に意識の変化を検討した。

その結果、モデル・コア・カリキュラムに準拠した「運動部指導実践論」を受講することで以下の効果が確認された。すなわち、①運動部活動の指導には体罰が必要という意識が低下し、②運動部指導の体罰・暴力に関して正しい理解が進んだことが確認された。指導者の体罰に関する知識を深めるも、③将来運動部の指導者になりたいという思いや、④かつての指導者に対する信頼感・親近感が否定的になることはなかった。

また、受講生の自由記述で挙げた学びの具体的内容には、①体罰根絶に向けた意識の高まり、②グッドコーチを目指す決意、③運動部指導への期待と不安、④安全への配慮・事故対応への意識の高まり、⑤アンガーマネジメントの活用、⑥目標設定の重要性が認められた。

このことより、モデル・コア・カリキュラムに準拠した「運動部指導実践論」の実施は、体罰根絶意識の高まりとグッドコーチの育成に効果があったといえるだろう。しかし、体罰・暴力に関する意識は改善したとはいえ、授業終了後も体罰は必要であるとする学生も一定数存在し、この問題の根絶の難しさが、改めて浮き彫りになった。

また受講生は、この後、コーチング実習ならびに教育実習時における部活動の見学や指導補助において、本授業で学んだ知識や技能をどのように発揮したかを記入するよう求められている。この成果は、本事業期間内では検討することができなかったが、実習を組み込むことは、「分かる」から「できる」までのプロセスにおいてきわめて重要であると考えられる。この点の検証も今後の課題である。

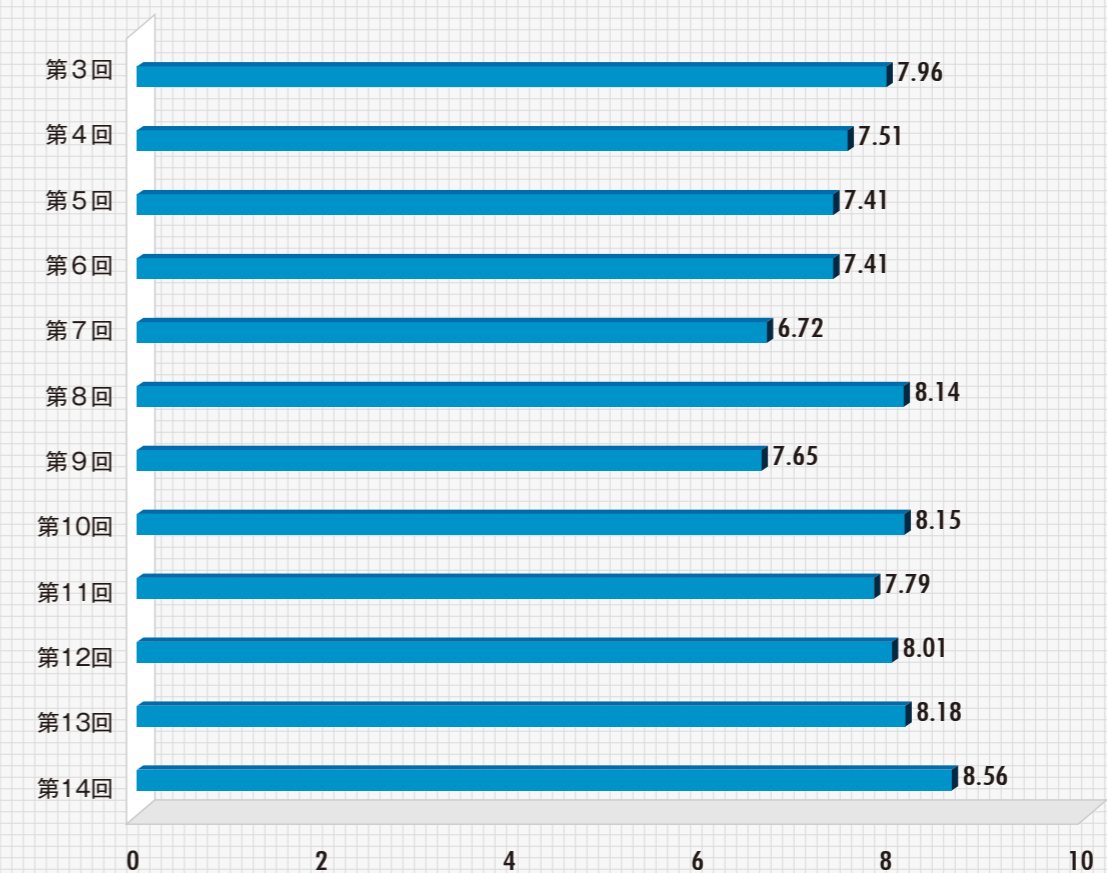
5-2 講義用マニュアルの作成に向けた課題等を検討・整理した成果

テキスト(教科書)には、「モデル・コア・カリキュラム」の趣旨を反映して編集された「運動部活動の理論と実践」(友添編著、大修館書店)を採用し、実際の講義を執筆者に依頼することで、より専門性の高い講師陣による授業が可能となった。また、各講師の協力と了承を得て、講義の進行や展開を記した「講義用マニュアル」を作成することができた。

一方、講義を外部講師によるオムニバスとしたために、外部講師との日程調整の結果、一部ではシラバスとは順序を入れ替えて実施せざるを得ない事態が生じた。受講生には予めそのことを伝え、体系を意識しながら知識を整理するよう依頼したが、この点は改善を要すると思われる。

また、講義はアクティブラーニングを取り入れ、予習(自宅学習)を重視した反転学習や、グループディスカッションなどを取り入れて実施することとした。しかし講義や講師によってその度合いは一定ではなく、それぞれの講義をどのように展開するかは、今後の課題である。本事業で作成された講義マニュアルを基に、議論の深まることが期待される。

図5-1は、第14回の講義において、ガイダンスを除く第3回講義以降の学びについて受講生に振り返りを行った結果である。受講生に対しては、各講義が各自の学びにとってどの程度役に立ったかを0~10点で評価してもらった。



■図5-1. 各講義における学生による評価の平均得点

集計の結果、全講義を通して平均値は6点以上の評価が得られたことから、本授業が概ね学生の学びにとって役に立ったと感じられる授業であったといえよう。その中でも、第8回「運動部指導における実践上の問題と対処法：中学校や高等学校の現場で直面する問題を中心に」、第10回「運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識：安全、事故防止、救急処置、スポーツ医・科学の知識の活用方法」、第13回「運動部指導における実践上の問題と対処法：ジュニアスポーツの指導場面での倫理的問題」、第14回「運動部指導における実践上の問題と対処法：競技力向上とアスリートファーストの両立」の評価が8点を越えるなど高かった。

このことから、基礎や理論的な内容に加え実際に起こった事例を取り上げることが、学生の興味や関心をより惹くことがわかった。アクティブラーニングを含め、どのような教材を用いて、どのように講義を展開するかがとても重要であると考えられる。

例えば今回は、講義マニュアルの作成を行ったが、今後は講師が使用した教材（配布資料やスライド）をもとに、ワークブックを作成し、教科書と合わせて活用することが役立つかもしれない。なお本報告書では、その基礎資料となることを期待して、「運動部指導実践論」のエッセンスを盛り込んだ映像資料を作成しているため、講義要マニュアルと合わせて活用していただきたい。

なお、大阪体育大学では、本事業の背景で述べた通り、「大体大ビジョン2024」の具現化をめざし、2016年4月にはじまった「DASH(Daitaidai Athlete Support & High Performance)プロジェクト」において、次代のスポーツ界を担うアスリートや指導者の育成に取り組んでいる。本事業の成果と課題は、大学スポーツの健全な推進を目的に、引続きDASHプロジェクトに引き継がれる予定である。

補遺：運動部指導実践論 講義用マニュアル

ここではモデル・コア・カリキュラムに基づいて実施された「運動部指導実践論」の実際を伝えるため、各講義の進行を記した単元指導案を「①講義用マニュアル」として提示する。

さらに講義の実態をより詳細に伝えるため、②講義の様子をスナップ写真とともに紹介し、

③各講義における学生のコメントをリフレクションペーパーから抜粋して示した。

また、これらの講義風景を修めた映像教材も別途作成したので、巻末資料としてテキスト原稿を添付した。

あわせて、取材資料についても掲載しているので、参照していただきたい。

1. 運動部指導の理念と哲学

1-1 「運動部指導の理念と哲学:基本理念(学校教育における位置づけ、現代社会におけるスポーツの意義と価値、高潔性)」

講師名:土屋裕睦(大阪体育大学) 実施日:第3回(10/5)

①講義用マニュアル

対象	大阪体育大学2年生 120名程度	日付/時間	2016年10月5日(水)4限14:40~16:10
テーマ	運動部指導における実践上の問題と対処法: 競技力向上とアスリートファーストの両立	場所	熊取キャンパス L301
シリーズ	運動部指導実践論 3/15	パートナー	山口助手、表口教務補佐、大学院生TA
対象者の経験	受講生はスポーツに関心が高く、部活動に所属しており、将来指導者を目指すものが多い。これまでの運動部活動において体罰を受けた経験もあり、新しい時代にふさわしいコーチングを模索している。「運動部指導実践論」では学内外の講師から最新の話題提供を受け、「分かる」から「できる」への転換を求められている。		
アウトカム	1)本授業の全体像を把握し、各自の運動部活動の体験を振り返りながら、学びの準備を行う。 2)運動部指導において体罰が許されない心理学的理由を検討し、体罰容認派を論駁できるようになる。 3)「スポーツの価値」「高潔性」について具体的な事象から考え、周囲と分かち合い(シェア)を行う。		
アウトカムの評価方法	授業内レポート、授業への取り組み態度		
個人的な目標	アクティブラーニングを用いて、授業を通して講師自身も受講生とともに学び、新しい時代にふさわしいグッドコーチを目指したい。		
準備	授業用スライド、配布資料(授業レポート)。		

進行

時間	アクティビティ	キーポイント
14:40	【概要紹介】本講義の目標、講義の進め方、提出物の確認	本授業科目の全体像の理解
14:50	【本授業の成り立ち(導入)】 スポーツの危機(2012年体罰問題)、タスクフォース、 体罰根絶に向けた大阪体育大学での取り組み(朝日新聞記事の紹介)	体育系大学の果たす役割
15:00	【本学の実態調査の紹介】 体罰の頻度、体罰容認度(大体連データと比較しながら紹介) 体罰の実態の確認(自身の体験の振り返り→シェアリング)	体罰の実態を理解する
15:10	【ロールプレイ】 ロールプレイ:体罰根絶派 VS 体罰容認派、体罰が許されない3つの心理学的理由	体罰容認派の意見が根強いこと、さらに論駁するのが難しいことを体験する。
15:30	【グループディスカッション①】(「スポーツの価値」に関する「二者択一」エクササイズ 練習問題:大阪体育大学の学生がたばこを吸うのは、ありかなしか?(6人組で実施) 回答例→「ありだと思う。なぜならたばこは個人の嗜好の問題だから」 →「なしだと思う。なぜなら体大生は健康教育の推進者でなければならないから」 →「なしだと思う。東京2020に向けてIOCだけでなくWHOも推奨しているから」 ①公平性:義足ジャンパー「マルクス・レーム」が五輪に出場するのは、ありかなしか? ②高潔性:甲子園において、強打者松井選手に対してすべての打席を敬遠するよう指示したのは、ありかなしか? ③連帯性:部員の不幸事により、チーム全体が対外試合禁止等の処分になることは、ありかなしか?	スポーツの価値について、モラルジレンマ(正解のない問いかけ)、グループディスカッション(シェアリング)、アクティブラーニングを用いて、理解を深める。
15:50	【グループディスカッション②】グッドコーチの条件とは各自の考えを短冊に書き出し、グループでKJ法的にカテゴリー化して共通要素をまとめる。	グッドコーチの条件を、自身の体験から導き、受講生間で分かち合う。
16:00	【発表】各班で取りまとめたグッドコーチの条件を発表する。	
16:10	レポートの作成。次回以降の外部講師担当講義については、予習を行うように伝える。	予習を重視した反転学習

メモ

1~3回までを授業の導入(ガイダンス)とし、次回以降の外部講師担当講義については、予習を行うように伝える。

②講義の様子

第1回講義時に実施したアンケート調査結果の速報を基に、受講生の体罰実態調査データを紹介し、その後体罰根絶派と体罰容認派に分かれてロールプレイを行った。最後にグループディスカッションを通じて、グッドコーチの条件をKJ法により討議した。



③学生のコメント

「自分が受けてきた体罰が正しいとは限らないかもしれないと思った。選手の自主性を尊重し、体罰がなくても強くなっている人はいると分かった。体罰をしなくても、チームや個々が成長し、強くなる指導法について知識を深めたい。また、体罰反対の強い根拠も欲しい。」

「体罰賛成という人ほど気持ちが強くしっかりとした意見を持っているので体罰反対を覆すのは大変だと思った。また、パラリンピアンへのオリンピック出場問題についても難しいと思った。体罰についてダメと相手は思うくらいの意見を考えておきたい。」

1-2 「運動部指導の理念と哲学:運営の在り方(生徒の自主性の尊重、効率的なマネジメント、中体連・高体連との関係)」

講師名:池上正(京都サンガ) 実施日:第4回(10/12)

①講義用マニュアル

テーマ	運動部指導の理念と哲学:運営のあり方(生徒の自主性の尊重、効率的なマネジメント)	
日付/時間	2016年10月12日(水)4限14:40~16:10	担当講師 池上正
対象	大阪体育大学2年生 120名程度	場所 熊取キャンパス L301
シリーズ	運動部指導実践論 5/15	
アウトカム	この授業の終わりには、受講者は学校クラブの運営方法および生徒の自主性を尊重した指導の考え方を身に付けていることが期待される	
アウトカムの評価方法	グループワークシート 1)学校クラブに入る時の手順について 2)もしも自分が新しいクラブを作るとしたら 3)学校運動部は何を目指したら良いのか 4)体験してきた指導者の指導法は? 5)どのような指導者を目指すのか	
準備	グループワークシート	
進行		
時間	アクティビティ	キーポイント
14:40	【導入】 【自己紹介】 ニュース映像による自己紹介	
14:50	【学校クラブに入る時の手順について】 【もしも自分が新しいクラブを作るとしたら】 ワークシートの1と2を記入 学生同士でシェアリング 全体で発表	
15:10	【学校運動部は何を目指したら良いのか】 ワークシートの3を記入 学生同士でシェアリング 全体で発表	
15:30	【体験してきた指導者の指導法は】 ワークシートの4を記入 学生同士でシェアリング 全体で発表	近代スポーツの起源と現在の運動部指導との繋がり 科学的指導法
15:50	【どのような指導者を目指しますか】 ワークシートの5を記入 学生同士でシェアリング 全体で発表	自由→遊び→スポーツ→ルール
16:10	【まとめ】 教えなくても強くなる指導法	生徒の自主性を重んじる指導

②講義の様子

本講義では、学校運動部活動の運営の仕方や生徒の自主性を育てる指導法について、それぞれの考えをシェアしながら進められた。



③学生のコメント

「今日の講義を聞いて、子どもたちの自主性を尊重し、答えを教える指導(自分だけが)をするのではなく、子どもに考えることを促すような興味を湧く指導をしていきたい。」

「生徒に考えさせ、生徒からの意見には柔軟に対応できる指導者、素朴な疑問に対してしっかり受け答えができる指導者になりたい。」

1-3 「運動指導の理念と哲学:暴力・ハラスメントの根絶、コンプライアンス」

講師名:西島央(首都大学東京) 実施日:第7回(11/2)

①講義用マニュアル

テーマ	運動部活動の意義と社会的役割 ～教育社会学の観点から～
日付/時間	2016年11月2日(水)4限14:40-16:10
対象	大阪体育大学2年生 120名程度
シリーズ	運動部指導実践論 7/15
資料	配布プリント3枚
進行	
時間	アクティビティ
導入	<p>【予習】 教室に来た人から、教科書第1章の2を黙読し、各自予習</p> <p>【担当講師による自己紹介】 教育社会学について、講師自身の部活動経歴の紹介、学校部活動に関する研究を始めるに至った動機</p>
展開	<p>【中学の部活動に関する多様な構え】 プリントP1を参考に、 ①自身の中学校の様子 ②図1の中学生それぞれの立場における部活動に参加する目的や期待について、学生同士で意見交換を行う。</p> <p>【部活動の意義・社会的役割】 以下のテーマについて、プリントP2～P4の図表を参照しながら学生同士で意見交換を行う。</p> <p>(1)学校教育活動の一環としての部活動 (2)中学生の部活動に対する多様な楽しみや期待とそこから読み取れる意義・社会的役割 (3)社会的な観点からみた部活動の意義・役割 (4)ポイントの整理 ①社会関係資本を蓄積する役割 友達との関係作り→教育格差を軽減する。 ②社会的包摂の役割 居場所を作る。危ない方に向かうのを止める。 ③文化的な格差を縮減する役割 経済的な裕福さより、文化的な経験やそれを通して身に付ける振る舞い方が格差を軽減する。</p>
まとめ	<p>【レポート課題】 以下のテーマについて、各自レポート用紙に考えを記入</p> <p>①どのような部活動を設置するか ②いくつくらいの部活動を設置するか …生徒数、教員数、学校の施設・設備・備品、地域社会の社会教育状況とのバランス ③加入の仕方をどうするか ④教員の関わり方をどうするか ⑤外部指導者(部活動指導員)の関わり方をどうするか ⑥練習・活動日や時間、活動場所をどうするか ⑦さまざまな目的や役割をどのように配慮して指導・運営していくか</p>

②講義の様子

教育社会学の視点から改めて運動部活動を捉えなおす試み。受講生は、中学生の部活動への期待に関する調査データを踏まえ、指導者はどうあるべきかを考えた。



③学生のコメント

「教育社会学からのスポーツの在り方は少し難しかった。私たちの大学での常識が社会では違うということはしっかり学べた。」

「部活と社会のギャップを感じた」

「部活動が持つ社会的役割(友達が出来ることや居場所を作ることが、格差社会の軽減に繋がる)を知った。運動部活動を指導する際には、ただスポーツの世界で勝つことだけを考えるのではなく、日本の社会的側面においても部活動が担う役割は大きいということも念頭に置いて活動しようと思った。」

2. 運動部指導者に求められる援用力

2-1 「運動部指導者に求められる援用力(人間力):指導者としての成長。学び続ける姿勢」

講師名:伊藤雅充(日本体育大学) 実施日:第5回(10/19)

①講義用マニュアル

対象	大阪体育大学2年生 120名程度	日付/時間	2016年10月19日(水)4限14:40~16:10
テーマ	運動部指導者に求められる援用力(人間力): 指導者としての成長、学び続ける姿勢	場所	熊取キャンパス L201
シリーズ	運動部指導実践論 04/15	パートナー	NA
アウトカム	この授業の終わりには、受講者は 1)自分の行動が過去の経験によって形づくられていることを意識し、 2)理想のコーチングを明確に述べ、 3)自らの学びの目標設定ができてい ることが期待される		
アウトカムの 評価方法	チームでのグループワークでの成果物		
個人的な 目標	初めて会う学生達をいかにアクティブにさせるのか。 トークをコンパクトにし、アクティビティを通して自ら学びの大切さに気づくような促しをする。		
準備	受けてきたコーチング漢字シート、やりたいコーチング漢字シート、グループワークシート(A3サイズ)、 振り返りシート、ストップウォッチ、ベル		
進行			
時間	アクティビティ	キーポイント	
14:20	【導入】 【自己紹介】自分のバックグラウンドをごく簡単に 【授業展開の注意点】ここでの会話内容を外部には持ち出さないことや、 それぞれの観点を認めること(否定しないこと)など を伝える。授業のルールづくり。		
14:50	【過去のコーチング】(3分で漢字に、10分でシェア) 「私が受けてきたコーチングを漢字一文字で表すと…」	自らの経験で始めることでアクティ ビティがやりやすい(下位の質問)	
15:03	「私がやりたいコーチングを漢字一文字で表すと…」	将来像を語るのとは簡単ではない (上位の質問)	
15:16	【解説】(5分) 過去の経験が行動に与える影響について	すでにコーチとしての学びは始まっ ている。	
15:21	【私たちがなりたいコーチ】(5分+シェア4分?) 「あなたたちが同じチームのコーチングスタッフだったとします。全員の漢字、 もしくは漢字の意味が入るようなコーチングを考え、1フレーズで表してみ てください。」	チームワーク 他者の意見も取り入れる	
15:30	【身につけるべき新しいスキル】(15分+10分) 「そのコーチングを実践するために、自分たちに足りない資質やスキルは何で すか」 「その資質やスキルはどうやれば身につきますか」	学び続ける姿勢 他者評価	
15:55	【解説】(5分) 学び続けることの楽しさ	コーチの学びについての研究成果 をコンパクトに伝える	
16:00	【振り返り】 新しく学んだことなどの振り返り。	時間と雰囲気が許せばペアで共有 する。	

②講義の様子

本講義では、過去に受けてきたコーチングと理想とするコーチングを明確にし、理想のコーチングを実践するには何が足りていないか、どうすればそのスキルが身につくかなどについて、学生同士で考えをシェアした。



③学生のコメント

「まず私が受けてきた指導を漢字一文字で表すと「厳」で、教えたい指導は「楽」と逆の指導だったことに気付いた。ポジティブではないが、どちらも必要な指導要素だと思うので、「楽」を主体的に考えながら「厳」も取り入れていく指導ができればいいなと思った。」

「これまでのコーチングを受けてきたことと自分が目指すコーチングの文字が同じでやはり自分は指導者に恵まれていたと思った。自分が当たり前と思っていた考え方や無意識を意識化するだけで、コーチングの力が高めることができる気がする。そのためには内省とコミュニケーションが大切だと思う。」

2-2 「運動部指導者に求められる援用力(人間力):広範な知識と複眼的思考力、観察学習力、マネジメント力」

講師名:吉田浩之(群馬大学) 実施日:第6回(10/26)

①講義用マニュアル

対象	大阪体育大学2年生 120名程度	日付/時間	2016年10月26日(水)4限14:40~16:10
テーマ	運動部指導者に求められる援用力(人間力): 広範な知識、複眼的思考力、観察学習力、マネジメント力	場所	熊取キャンパス L201
シリーズ	運動部指導実践論 04/26		
対象者の経験	現行学習指導要領・総則に、部活動は学校教育活動の一環であることが規定されている。受講生(体育大学の学部2年生)の運動部活動に関する経験としては、自らの活動経験が中心であり、指導的立場を経験する機会も限定的で、運動部活動全般に共通する指導の在り方や、教育活動としての部活動に関して学ぶ機会は、乏しい現況にあると考えられる。		
アウトカム	部活動では目標を設定する機会が豊富にある。運動部活動に取り組む選手は、教育機関に所属している生徒でもあり、その目標には教育的観点に立った内容の設定が期待される。本講義を通じて受講生は、教育的観点に立った目標設定の方法について理解を深め、自らを対象に具体的に目標を設定することができるようにする。また、そのような目標設定の方法について、生徒(選手)に説明するシナリオを構想できるようにする。		
アウトカムの評価方法	評価シートを活用し、「本講義の目標に対応した課題への記述状況」と「本講義の目標達成に対する受講者の自己評価の状況」から評価する。		
個人的な目標	教育機関に所属する生徒(選手)が取り組む運動部活動は、教育活動の側面を持つ。教育的視点を持って指導に携わる姿勢の必要性を伝える。		
準備	講義用資料(冊子)、記述式評価シート、パワーポイント、視聴用DVD、ストップウォッチ		
進行			
時間	アクティビティ	キーポイント	
14:20	【導入】 ● 配付資料の確認する ● 本講義の目標と授業ルールを把握する	● 到達目標、講義項目、提出課題、授業ルールを共有し、本授業の全体像を理解させる。	
14:40	【展開】 第1(これまでの目標の振り返り) ● 高校時を振り返り、部活動に関するチーム目標、個人目標を記述する	● これまでの目標とルールを書き出させる。ルールの中に有形・無形の目標内容が含まれている場合が多いことにも注目させる。	
14:50	第2(目標の整理) ● 書き出した目標を分類する。「主として個人的側面、社会的側面の観点」と「有形的内容、無形的内容の観点」の4つの観点で分類する。	● 教育的観点(4観点)で整理する方法を理解させ、それに基づき目標が分類できるようにする。	
15:10	第3(目標設定方法の具体例) ● 具体例を通じて、「目標の書き出し」と「目標の文章化」の方法について理解する。	● シートを活用し、目標の書き出しと文章化の手順が明確になるようにする。	
15:30	第4(特定の観点到偏った指導の懸念) ● 指導者が特定の考え方や目標を持った場合に懸念される事例を想定する。	● 指導者の分類に目標設定の4観点を活用できるようにする。	
15:50	第5と第6(集団のマネジメントの視点) ● 生徒(選手)がチームに適応している状況を把握する方法を知る。	● チームおよび生徒(選手)について、観察以外で適応状況を把握する視点を持たせるようにする。	
16:00	【整理】 ● 本講義の目標に対応する課題について記述する。 ● 本講義の目標達成に対する自己評価をする。	● 評価シートへの記述状況を通じて、学びの状況を見る。	

②講義の様子

目標設定を中心に実際に作業を行うことで、運動部指導者に求められる援用力(人間力)を確認し、広範な知識と複眼的思考力の必要性を理解した。



③学生のコメント

「目標を設定することで課題が明確になる。様々な視点から物事を見ることが大切だと思った」
 「目標設定が成功への近道であるとわかった。」
 「目標設定の仕方を初めて学んだ。自分の目標を4つの観点(自分-自分以外、有形-無形)から分類することで、より具体的な内容が抽出することができた。目標設定をすることで生徒は目標が明確になり、教師は生徒理解を深めることができる。生徒がより充実した学校生活を送るためには必要なエクササイズだと思った。」

2-3 「運動部指導者に求められる援用力(人間力):内省、セルフコントロール(アンガーマネジメントを含む)」

講師名: 渋谷崇行(桐蔭横浜大学) 実施日: 第11回(12/14)

①講義用マニュアル

対象	大阪体育大学2年生 120名程度	日付/時間	2016年12月14日(水)4限14:40~16:10
テーマ	運動部指導者に求められる援用力(人間力): 内省、セルフコントロール(アンガーマネジメント)	場所	熊取キャンパス L301
シリーズ	運動部指導実践論 11/15		
対象者の経験	受講生はスポーツに関心が高く、指導者の道を選択する者も多くいるであろう。当然、スポーツ指導を巡る問題として体罰が存在するという認識は持っている。しかしながら、体罰への理解や態度は受講生のこれまでのスポーツ経験によって異なることも予想される。「運動部指導実践論」も終盤に差し掛かり、学習内容を自分自身が受けてきた指導と照らし合わせることによって、様々な気づきを得ながら、自らのスポーツ指導観を形成している最中にあるといえる。		
アウトカム	1) 体罰を行わないようにするうえで怒りの感情をコントロールすることが重要であることを理解する。 2) そのための一つの方法である「論理療法」の道筋を体験的に理解する。 3) 「非論理的ピリフ」にうまく対応することで、大学生活や将来の指導場面でアンガーマネジメントができるようになる。		
アウトカムの評価方法	個人ワークの記述内容。		
個人的な目標	指導者自らが学ぶことが重要であることの理解を促したい。 また、そうした過程に主体的に関わる姿勢や自分自身が将来のスポーツを担うという意識を高めたい。		
準備	授業用スライド、配布資料(講義内容ワークシート、途上国スポーツ支援、論理療法ワークシート)。		

進行

時間	アクティビティ	キーポイント
14:20	【概要紹介】 授業目標、授業の進め方、自己紹介 【スポーツの効果】 私たちはスポーツを通じて何を得てきたのか(個人、ペア、集団) 【スポーツの価値】 価値あるスポーツを多くの子供に届けたい(途上国スポーツ支援紹介)。	概要理解と興味 効果確認 好奇心と可能性
15:00	【スポーツ(指導)観の形成】 授業者のスポーツとの関わり(スポーツとの出会い、有能感、暴力との出会い、スポーツ観の形成、ある言葉との出会い、スポーツ観の再構成、研究と実践)。	経験がスポーツ観を形成する。使命感。
15:20	【体罰コーチの4タイプ】 体罰の弊害(動機づけの観点から) 体罰を行うコーチの4タイプ(確信型、指導方法わからず型、感情爆発型、暴力好き型)。	概念的理解(過去の体験から類推)。
15:25	【アンガーマネジメント】 アンガーマネジメントの考え方(感情との付き合い方、アンガーマネジメントとは、第二次感情と第一次感情)。 怒りの感情が発生するメカニズム(出来事→意味づけ→感情表出)。 論理療法(非論理的ピリフへの対応)の体験:説明(5分)、個人ワーク(10分)、シェア(5分)。 怒りの感情への対応(6秒、セルフトーク、尺度評価)。	概念的理解(新規の情報) 「べき」への関心 スキル向上への一歩 実践へのヒント
16:05	【指導力の向上に向けて】 グッドコーチに向けた7つの提言。 「指導力」を高める方法。 「時代に取り残された」指導者にならないために。 スポーツで青少年の成長を支援するために。	コーチ育成の基準 体験と省察 経験主義的指導 次世代につなぐ
16:10	【総括】グッドコーチになる意志を持つ。	主体性、コミットメント、勇気。

②講義の様子

運動部指導者に求められる援用力(人間力)のうち、特にアンガーマネジメントを取り上げ、怒りの感情が発生するメカニズムや、その感情との付き合い方について具体的な技法を学んだ。



③学生のコメント

「生徒との接し方についてよく理解できた。」

「熱い心と冷たい頭脳はとも心に刻み続けておこうと思った。」

「アンガーマネジメントは印象的であった。本授業で一番覚える価値のある内容だった。」

「スポーツが色々な事への影響があるということを学んだ。6秒待ったらイライラが収まるなど役に立つことを学べた。」

2-4 「運動部指導者に求められる援用力(人間力):コミュニケーション・スキルの向上
(生徒、保護者、指導者間の連携)」

講師名:岡達生(日本体育協会) 実施日:第12回(12/21)

①講義用マニュアル

対象	大阪体育大学2年生 120名程度	日付/時間	2016年12月21日(水)4限14:40~16:10
テーマ	運動部指導者に求められる援用力(人間力): コミュニケーション・スキルの向上(生徒、保護者、指導者間の連携)	場所	熊取キャンパス L301
シリーズ	運動部指導実践論 11/15		
対象者の経験	受講生は体育大学の学部2年生であり、アスリートとしての経験は豊富にあるが、コーチとしての経験は薄い、あるいは皆無であると考えられる。ただ、本授業のこれまでの学びにより、新しい時代にふさわしいコーチングについて理解が深まっていると思われる。		
アウトカム	この授業の終わりには、受講者は コミュニケーション・スキルを高めることによって、「①信頼関係を構築する、②行動を起こさせ、潜在能力を発揮させる、③個々のパフォーマンスを上げ、組織を活性化させる」ことに気づく。 そのため、 1) ペーシングを利用して、相手が話しやすい雰囲気を作り、発言を否定せず、最後まで話を聴くことができるようになる 2) 相手の変化に気づき、具体的な言葉にして伝えることができるようになる 3) オープンクエスチョン・チャックダウンを使い、相手の考えや気づきを引き出すことができるようになる 4) 納得感の高い説明ができるようになる ことが期待される		
アウトカムの評価方法	評価シートによる自己評価、他者評価		
個人的な目標	聴く力を高めることが、良好な信頼関係構築の第一歩であることに気づいてもらう。		
準備	事前課題(12/12までに土屋先生に送付)、ワークブック、評価シート、ストップウォッチ		
進行			
時間	アクティビティ	キーポイント	
14:40	【自己紹介】自分のバックグラウンドをごく簡単に 【アウトカムの提示】授業を通して気づいてほしいこと、実践できるようになることを明確に伝える。 【授業展開の注意点】重要なことは、授業に積極的に参加すること、できるだけ数多く自分の意見を発言することを伝える。また、それぞれの観点を認めること(否定しないこと)などを伝える。		
14:43	【傾聴力を高めることが大切】(5分) まずは、聴くことが大事 「きく」を漢字で書きましょう。(個人ワーク1分) 聞く(hear=音を聞く)、訊く(ask=自分が知りたい、尋ねる)、聴く(listen=相手の言いたいことを理解しようと努力する) 【グループ分け】(2分) 事前課題で同じ意見の人のかたまりをつくる(座席の移動)→2人1組をつくる 挙手してもらい、大まかに教室内で2つのグループに分け、そこでペアをつくる	聞く 聴く 訊く 菊 効く 利く	
14:50	【コミュニケーション・スキルを高める】(20分) ペーシング、オープンクエスチョン、チャックダウンの解説+デモンストレーション(8分) 「好きな食べ物は何か?」2人1組(インタビュー2分、フィードバック30秒)×2回 「今までで一番印象に残っている一言について教えてください」2人1組(インタビュー2分、フィードバック30秒)×2回	解説とデモンストレーションは簡潔にわかりやすく、短めに	
15:10	【ケースメソッド「インターハイ予選登録メンバーを決める」】6人1組(25分) 「事前課題(ケースメソッド)に基づく主張」(15分) 1人1分から2分で説明し、残りの時間で意見交換(必ず全員が自分の主張を述べること) 「グループ内の意見を発表」(それぞれ2チーム(計4チーム)から各1分間の発表)	限られた時間の中で、全員が他者の意見を聴けるように努力することを働きかける コミュニケーション・スキルを使うように促す	
15:35	【納得感のある説明をしよう】(10分) 「納得感のある説明」について解説(5分) 説明の準備(5分) グループごとに、自分たちの主張を他者へわかりやすく説明するための準備をする 【自分たちの主張を説明しよう】(10分) それぞれ2チーム(計4チーム)から1分間の発表	意見交換に時間をかけるより、具体的な説明内容を検討することを促す	
15:45	【ロールプレイ「岩下、浦坪へ説明」】 2人1組で土田役と岩下役または浦坪役になって、リアルな状況をイメージしてコミュニケーションする(2分×2回) 数名から感想を聴く(5分)	1対1のコミュニケーションを行ったが、チーム全体のモチベーションを考えた場合、その他に方法はないか?	
15:55	【振り返り】 授業の内容を振り返ってまとめ 最後にコミュニケーションの解説(5分) 「告白を断る」ときのコミュニケーション 【自己評価、他者評価】 自己評価と他者評価		
16:10	【終了】		

②講義の様子

本講義では、コミュニケーション・スキルに着目し、ケースメソッドを用いて、身近な事例(インターハイ予選登録メンバーを決める)を基にエクササイズを行い、良いコミュニケーションと不十分なコミュニケーションを体験し理解を深めた。



③学生のコメント

「自分が言いたいことより相手にどのように言うのと良いかを考えるべきである。強弱をつけることによって伝わり方が全く異なる。」

「今日の授業でコミュニケーションを本当の意味でとる方法が難しいと思った。簡潔にしっかり言うことが大事だと思った。」

3. 運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識

3-1 「運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識:競技特性に応じた指導、実技指導能力の向上」

講師名: 嶋崎雅規(国際武道大学) 実施日: 第9回(11/30)

①講義用マニュアル

対象	大阪体育大学2年生 120名程度	日付/時間	2016年11月30日(水)4限14:40~16:10
テーマ	運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識: 生徒主体の部活動、顧問としての教師の役割	場所	熊取キャンパス L301
シリーズ	運動部指導実践論 09/15		
対象者の経験	現行学習指導要領・総則に、部活動は学校教育活動の一環であることが規定されている。受講生(体育大学の学部2年生)の運動部活動に関する経験としては、自らの活動経験が中心であり、指導の立場を経験する機会は限定的で、運動部活動全般に共通する指導の在り方や、教育活動としての部活動に関して学ぶ機会は、乏しい現況にあると考えられる。		
アウトカム	この授業の終わりには、受講者は 1) 生徒主体の部活動の在り方を理解し、実践することができる 2) 教師の仕事の中の部活動の位置づけを理解し、説明することができる 3) 教師として、部活動顧問として留意すべき点を理解し、説明することができる ことが期待される		
アウトカムの評価方法	個人の記入したワークシート、チームでのグループワークの成果物		
個人的な目標	初めて会う学生達をいかにアクティブにさせるのか。 自ら考え、発表すること、また他人の意見を聞くこと通して自ら学びの大切さに気づくような促しをする。		
準備	ワークシート(個人用・グループワーク用)、パワーポイント		
進行			
時間	アクティビティ	キーポイント	
14:40	【導入】 【自己紹介】 自分のバックグラウンドをごく簡単に 【授業展開の注意点】 ここでの会話内容を外部には持ち出さないことや、それぞれの観点を認めること(否定しないこと)などを伝え、グループワークに積極的に参加するよう促す。授業のルールづくり。ワークシートの記入の仕方などを確認する。	自らが現場の教員として長く勤務してきた経験から、本時で伝えたいことを確認する。	
14:50	【教師の仕事】 (10分でグループワーク、5分でシェア) 「(中学校)教師の仕事には、具体的にどのようなものがあるでしょうか?」 「挙げられた仕事に優先順位をつけてみてください」	自らの生徒としての経験から教師の仕事について考え、それぞれの重要度について話し合う。	
15:05	【解説】 (20分) 自らの教員経験に基づいて具体的な仕事の内容を紹介する	教師の仕事は本当にたくさんあり、部活動指導はその中心ではないことを確認する。	
15:25	【運動部活動とは】 (5分) 学習指導要領等を確認する	部活動は、生徒の自主的自発的参加によるものであることを確認する。	
15:30	【顧問教師の役割】 (10分でグループワーク、5分でシェア) 「部活動顧問の役割にはどのようなものがあるでしょうか?」 「部活動顧問(教師)として気をつけておくべきことは何か?」	顧問教師になったつもりで考えてみる。 他者の意見も取り入れる。	
15:45	【解説】 (15分) 運動部活動の在り方や教師として気をつけておくべきことを一緒に考える	教師の立場で気をつけるべきことを考える。	
16:00	【振り返り】 新しく学んだことなどの振り返り。	ワークシートに記入する。	

②講義の様子

講師の体験に基づき、教師の日常を披露し、その中で運動部指導の果たす重要性、役割を理解し、生徒主体の運動部活動のあり方について、グループ討議を通じて検討した。



③学生のコメント

「指導者に必要なのはコミュニケーション力であり、「論理」と「言葉」によって説得し、選手にプレーさせることが必要である。自立した選手になるためには、日々のトレーニングの意図を自分で考えることが上手くなる秘訣である。常に学ぶ姿勢や日々楽しんで生活することが大事である。」

「成長に繋がるものは部活動が一番である。授業では確かにスキルの成長は期待されるが強くはならない。生徒のスキルをアップさせるには生徒と同じ目線に立つ必要があると思った。」

3-2 「運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識：
安全、事故防止、救急処置、スポーツ医・科学の知識の活用方法」

講師名：南部さおり（日本体育大学） 実施日：第10回（12/7）

①講義用マニュアル

対象	大阪体育大学2年生 120名程度	日付/時間	2016年12月7日(水)4限14:40～16:10
テーマ	運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識： 安全、事故防止、救急処置、スポーツ医・科学の知識の活用方法	場所	熊取キャンパス L301
シリーズ	運動部指導実践論 10/15	パートナー	NA
アウトカム	この授業の終わりには、受講者は 1) スポーツ指導者は、目の前の事象を的確に判断すること、 2) その判断に基づき、迅速に対応・処置ができること、 3) これらの判断・処置の誤りによって、生徒の生命や身体が危険にさらされること などのことを理解することが期待される		
アウトカムの評価方法	チームでのグループワークでの成果物		
個人的な目標	いかに危機場면을リアルに設定するか。 設定された危機場面に對し、学生にどこまでの具体的な危機感を持たせることができるか。		
準備	グループワークシート（A3サイズ）グループ×3、ストップウォッチ		
進行			
時間	アクティビティ	キーポイント	
14:20	【導入】 【自己紹介】 自分のバックグラウンドをごく簡単に 【授業展開の注意点】 ここでの会話内容を外部には持ち出さないことや、それぞれの観点を認めること（否定しないこと）などを伝え、グループワークに積極的に参加するよう促す。授業のルールづくり。ワークシートの記入の仕方などを確認する。		
14:25	【スポーツ指導における安全配慮義務】 解説：スポーツの安全配慮義務と「予見」（人・用具・施設・プログラム）	具体的に例示して、アイデア（予備知識）を貯めさせる。	
14:40	【演習①】頭部外傷 解説（問題の設定）		
14:45	問題提示	実際の事故事例の提示	
14:50	「この顧問の対応は適切であったか？ どうすればよかったのか？」 グループディスカッション・成果物作成（10分）	結果を知らせないままで対応について考えさせる（⇒まさに安全配慮の問題）	
15:00	グループ発表（15分）		
15:15	解説：スポーツと頭部外傷 急性硬膜下血腫、脳振盪	「こんなに怖い頭部打撲」 写真などのビジュアルを用いて具体的な傷害をイメージさせる。	
15:40	【演習②】熱中症（1） 問題提示（1分）：競技や練習中における、望ましい水分の摂取方法は次のどれですか。	チームの総意を結集させ、正答を1つ挙げさせる	
15:43	グループワーク（2分） ⇒ グループの答え（記号）を紙に書いて拳上		
15:45	【演習③】熱中症（2）		
15:47	グループワーク（2分） ⇒ 《問題》と思う箇所に線を引く 解説・答え合わせ	実際の事故事例の提示。「何が問題であったか」をチームで考える。 熱中症に関する知識の再確認と「知らなかったこと」への気づきの共有	

②講義の様子

運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識のうち、スポーツ医・科学の知識の活用方法に焦点を当て、安全、事故防止、救急処置の最新情報について学んだ。



③学生のコメント

「脳震盪には脳の揺れが強いことから脳が変化・変形する恐れがあり、最悪な場合、意識がない状態が続くこともある恐ろしい事故であるということを認識できた。脳震盪が生じたとき、早急に病院に搬送することや、必ず誰かが傍にいて死亡確率は減ると思う。熱中症でも死亡する可能性もあり、熱中症が発症する条件を予め考えることが大切だと思った。」

「先生になった時の適切な対応が少しは分かったと思う。その場に鉢合わせた時どうすればいいのかということを理解できた。」

「2つの事例は注意しておかないと教師はやりかねないと思った。この事件を聞いた経験を教師となった時に活かしたい。指導という立場はリスクも伴うので安全面に関しての気配りは大切で責任が問われる。指導者がいない時に厳しい練習をさせないようにする。」

4. 運動部指導における実践上の問題と対処法

4-1 「運動部指導における実践上の問題と対処法:中学校や高等学校の現場で直面する問題を中心に」

講師名: 中小路徹(朝日新聞社) 実施日: 第8回(11/16)

①講義用マニュアル

対象	大阪体育大学2年生 120名程度	日付/時間	2016年11月16日(水)4限14:40~16:10
テーマ	運動部指導者における実践上の問題と対処法 中学校、高等学校で直面する問題を中心	場所	熊取キャンパス L301
シリーズ	運動部指導実践論 11/16		
対象者の経験	受講生は体育大学の学部2年生で、入学前、中学・高校時代に学校の運動部活動、または学校外の地域クラブなどのスポーツ活動において優秀な成績を取った学生や、自らの競技能力が高い学生が多いだろう。その過程で、指導者の暴力的指導や、理不尽な「しごき」「ハラスメント」を受けながらも、それを乗り越えてきたが故に肯定的にとらえる学生や、スポーツが得意でない人の心理を実感できない学生が少なくないと思われる。		
アウトカム	この授業を受け、受講者は ①暴力的、強圧的な指導が肯定的なものではないこと ②指導上、事故につながる危険因子がどこにあるかに関する知識や、安全意識が重要であること ③指導するうえで、初心者や実力がない子どもへの配慮が必要であること などを学び、自らがスポーツ指導者になった時の留意点として脳裏に残せることが期待できる。		
アウトカムの評価方法	個々の事故、事件の事例を紹介した後、何が問題点であり、指導者には何が必要かをグループワークで話し合わせ、結論を発表させる。その成果物を評価方法とする。		
個人的な目標	学生は取材活動をする記者と、普段はあまり触れあったことがないと思う。その立場から、運動部活動の問題点がどうみえるかということを知りやすく伝える一方、学生が、部活動についてどう思っているかを自然と「取材」できるくらい、対話の雰囲気を作りたい。		
準備	講義用資料(新聞記事のコピー、事例概略のまとめ)、ストップウォッチ		
進行			
時間	アクティビティ	キーポイント	
14:20	【導入】【自己紹介】、 ●配付資料の確認 ●取材上、知り得た情報が混じるので、SNSには授業内容を書き込まないことをお願いする		
14:40	【第1の事例提示】 中学生の新体操クラブで、指導者がミスななじりながら平手打ちや足蹴、心理的に追いつめる暴言を繰り返した事例。選手が親に自殺をほのめかし、親の判断で新体操をやめさせた。	●事例紹介は概略だけにとどめ、グループワーキングの前には、問題点がどこにあるのか、こちらから答えを出さない。	
14:45	【第1の事例の問題点、望ましい指導の在り方を各グループで話し合い】		
15:05	【各グループの発表】		
15:10	【発表内容に関して、講師のコメント】		
15:15	【第2の事例提示】 高校剣道部で、顧問の暴力的、強圧的な指導の下、主将が熱中症で死亡した事例。主将が意識を失っているのに、顧問が馬乗りになって往復ビンタを続けた凄惨な指導。	●各事例が極端なものではなく、どこでも身近に起こりうることであり、一歩間違えれば、自分が指導者になった時にも引き起こす可能性があることを知ってもらう。	
15:20	【第2の事例の問題点、望ましい指導の在り方を各グループで話し合い】		
15:30	【各グループの発表】		
15:35	【発表内容に関して、講師のコメント】		
15:40	【第3の事例提示】 中学柔道部で、中学1年が上級生の技を受け、頭を打って意識不明の重体になった事故。受け身能力が不足したまま大外刈りを受けさせた結果。 【第3の事例の問題点、望ましい指導の在り方を各グループで話し合い】 【各グループの発表】 【発表内容に関して、講師のコメント】	●指導するうえで、自らの競技能力や、受けてきた指導経験に頼ることが、普遍的な効果を及ぼすものでないこと、逆に多くの弊害につながることで、そして大きな事故につながる危険があることを実感してもらう。	
16:00	【総括】 ●暴力的な指導、事故を起こしやすい指導の問題点として出てきたことを総括する。	●講師の方から、感じたことも交える	

②講義の様子

運動部指導における実践上の問題と対処法を学ぶため、中学校や高等学校の現場で直面する問題を中心に、実際に起こった事故等に関わる報道資料を基に、対応法の実例を学んだ。



③学生のコメント

「「安全面」を考えた指導が今できていないことが多いと思った。指導者は生徒(選手)の気持ちや技術レベルを把握することに努め、決してハラスメントをしてはならないと思う。また指導者はスポーツで起こり得る危険なプレーや場面があることをより慎重になって想定する必要がある。」

「3つの事例の全てに共通していることは指導者が正しい行動をとれば、起こることのない事例であった。生徒の練習が限度を超えている状態が当たり前となっている今、スポーツの持つ価値が少し別の方向へと変化していると思う。」

4-2 「運動部指導における実践上の問題と対処法:ジュニアスポーツの指導場面での倫理的問題」

講師名:友添秀則(早稲田大学) 実施日:第13回(1/11)

①講義用マニュアル

対象	大阪体育大学2年生 120名程度	日付/時間	2017年1月11日(水)4限14:40~16:10
テーマ	ジュニアスポーツの指導場面での倫理的問題 スポーツ指導者に必要な資質・能力	場所	熊取キャンパス L301
シリーズ	運動部指導実践論		
対象者の経験	受講生は体育大学の学部2年生であり、アスリートとしての経験は豊富にあるので、自身のスポーツの被指導場面を振り返りながら、現在のスポーツ指導場面での体罰やジュニアアスリートの諸問題に対する理解を得ることは難しくないと予測される。加えて、スポーツ指導者に接する機会が多かったと予測されるので、スポーツ指導者の資質・能力に対する一定の見解を持っていると推測され、学習の構えはできていると思われる。		
アウトカム	この授業の終わりには、受講者は 1)ジュニアアスリートの現実や問題状況を理解し 2)よいスポーツ指導のあり方を自らの経験を止揚する形で明確にし、 3)よいスポーツ指導者に必要な資質や能力がどのようなものかを理解できることが期待される		
アウトカムの評価方法	授業での学びの感想を記したリアクションペーパー		
個人的な目標	初めて会う学生達にジュニアスポーツの現実や諸問題をいかに深く理解させるか。 授業内容をもとに、授業後、学生自らが自身のスポーツ経験をいかに反省的省察へと促せるか。		
準備	リアクションペーパー(A4サイズ 受講生人数分~各自1枚 事前配布)		
進行			
時間	アクティビティ	キーポイント	
14:20	【導入】 【自己紹介】 自分のバックグラウンドと本授業の概要		
14:25	【トップアスリートとスポーツの社会的意味 解説】 東日本大震災とスポーツの力とその限界、トップスポーツをめぐる社会のアンビバレントな感情を知り、理解する	トップスポーツをめぐる社会の複雑な感情	
14:30	【トップアスリートの事例から考える 解説】 東日本大震災時の高校球児の倫理的逸脱行為とその原因の探究	トップアスリートをめぐる問題の理解を広げる	
14:40	【ジュニアアスリートの現実と問題 解説】 低年齢化問題とジュニアアスリート育成の諸問題(マイクロとマクロの視点から)について知る。	マイクロとマクロの関係の理解	
15:00	【体罰問題をめぐって 解説】 体罰発生の原因(成果主義、誤った勝利至上主義、特異な権力構造について)を考え、理解する。	体罰問題の根深い問題性	
15:20	【よいスポーツ指導の特徴 解説】 よいスポーツ指導に必要な教授技術について知り、理解する。	教授技術についての理解	
15:30	【よいスポーツ指導者の資質能力について ディスカッションと発表】 周りとディスカッション(3分) 2分で全体発表・シェア 計5分 解説・説明 10分	代表的意見の拾い上げ	
15:45	【フェアプレイとスポーツマンシップ(スポーツパーソンシップ)の由来と内容 説明】 フェアプレイとスポーツパーソンシップを教えることの重要性について理解する。	重要性の理解へのいざない	
15:55	【スポーツの問題解決の方法について 解説】 スポーツ観の転換の必要性について理解し、新たなスポーツ哲学の構築の必要性を知る。	哲学的な理解	
16:00	【まとめ】 学んだことの省察 リアクションペーパー課題について	リアクションペーパーの問題意識をつなげる	
メモ			
授業後に今日の授業の感想をリアクションペーパーに書いてもらう→後日、友添宛て郵送して頂く			

②講義の様子

運動部指導における実践上の問題と対処法として、ジュニアスポーツからトップアスリートにいたる様々なコーチング場面での倫理的問題について理解を深めた。



③学生のコメント

「スポーツマンシップはスポーツだけでなく日常生活でも発揮されないといけない。スポーツのみをしていけばいいというわけではない。私は高校の時にスポーツマンシップについて指導者から徹底的に教えてもらった。スポーツで紳士ならば日常でも紳士であってこそ本物の人間であり、スポーツ選手が体罰や問題行動でスポーツ自体の価値を下げるようなことはして欲しくない。そのために私たちがスポーツ指導者として教える立場に立った時に、スポーツのみにしか目を向けることができない指導者ではなく、私生活まで目を配り、人間性、社会性を育むことができる指導者になることが大切であると考えてる。」

「スポーツの指導者がもっと考え方を変えて、現代の考え方を広めていくべきだと思った。勝つことは大事であるがそれが手段になってしまっはいけない。このことが一番印象に残った。スポーツは負けるのが当たり前であり、負けることがスポーツの1つの意義や価値であると思うが、勝つことだけがスポーツの意義であるとするならばおかしくなる。」

4-3 「運動部指導における実践上の問題と対処法:競技力向上とアスリートファーストの両立」

講師名:土屋裕陸(大阪体育大学)実施日:第14回(1/18)

①講義用マニュアル

対象	大阪体育大学2年生 120名程度	日付/時間	2017年1月18日(水)4限14:40~16:10
テーマ	運動部指導における実践上の問題と対処法: 競技力向上とアスリートファーストの両立	場所	熊取キャンパス L301
シリーズ	運動部指導実践論 14/15	パートナー	山口助手、表口教務補佐、大学院生TA
対象者の経験	受講生はスポーツに関心が高く、部活動に所属しており、将来指導者を目指すものが多い。これまでの運動部活動において体罰を受けた経験もあり、新しい時代にふさわしいコーチングを模索している。「運動部指導実践論」では学内外の講師から最新の話題提供を受け、「分かる」から「できる」への転換を求められている。		
アウトカム	1)本授業の概要を振り返り、単元の授業評価を行いながら、学びの整理を行う。 2)体罰根絶に向けた課題と体罰が許されない科学的理由を確認し、体罰容認派を論駁できるようになる。 3)実際の指導現場をイメージしながら、指導力の向上のための「7つの提言」を自ら考えてみる。		
アウトカムの評価方法	授業内レポート、授業への取り組み態度		
個人的な目標	新しい時代にグッドコーチとして指導現場に立ちとうとする学生たちと、授業を通して講師自身とともに学び、引き続き講師自身もグッドコーチを目指していきけるよう、研鑽を積みたい。		
準備	授業用スライド、NHK放送DVD、体罰映像、配布資料(授業レポート)。		
進行			
時間	アクティビティ	キーポイント	
14:40	【概要紹介】 本授業目標、授業の進め方、提出物の確認	授業概要の理解	
14:50	【本授業の成り立ち(復習)】 2012年体罰問題、タスクフォース、モデル・コア・カリキュラム作成 大阪体育大学での取り組み(学長・学部長会、体育学会シンポジウム)	体育系大学の果たす役割	
15:00	【授業の構成と振り返り】 個人での振り返り→グループでのシェアリング 外部講師による講義の概要と振り返り(役立ち度の評価:10点満点): 池上 正・伊藤雅充・吉田浩之・西島 央・中小路徹・嶋崎雅規・南部さおり・ 渋谷崇行・岡 達生・友添秀則	授業概要の復習、学びの体系を理解する。	
15:30	【体罰根絶に向けた課題と挑戦】 メディアでの紹介の様子(朝日新聞、NHK放送)→学びの振り返り(レポート 記入) ガイダンスデータの紹介(受講生の体罰意識) ロールプレイ:体罰根絶派 VS. 体罰容認派 体罰映像の視聴→体罰が許されない3つの心理学的理由(エビデンス)	社会的関心も高いことを理解する (スポーツは社会的活動である) 根強い体罰容認派の存在。 科学的知見(エビデンス)に基づく 指導の重要性。	
15:50	【指導力の向上に向けて】 体罰に変わる指導技術(目標設定、イメージトレーニング、チームビルディング...) グッドコーチに向けた7つの提言	「分かる」から「できる」への転換。	
16:00	【総括】グッドコーチになる意志を持つことの重要性。		
16:10	レポートの作成と次週の予告。授業評価実施。	主体性、コミットメント、勇気。	

②講義の様子

授業全体のまとめとして各講義の要点のレビューを行い、グッドコーチになるための必要条件(学び続けることの大切さ、他)を確認した。




③学生のコメント

「体罰を受けたから強くなれたのか考え直す必要がある。叩かれたから強くなったというわけでもない。体罰があってもなくても成長ができるとしたら、体罰は必要なくてもいいのではないかと思う。」

「体罰については特に理論、エビデンスをしっかり持つことが自分自身の行動にも繋がると思った。この講義を受けたことで指導者になっても成長していくことは大切であり、指導は方法が沢山ありゴールは同じでも道は色々あると思った。」

1. 映像資料の作成

本授業の実施内容のエッセンスについて、およそ10分間の映像にまとめた。以下、その台本テキストを資料として示す。

《運動部指導実践論》		
コーチとしてのキャリア形成支援プログラム		
～新しい時代にふさわしいコーチングを目指して～		
Time	Picture	Action
● オープニング		
0分30秒	<p>＊黒バックに字幕テロップを表示</p> <p>＊スポーツシーンの写真をコラージュした背景に、タイトルIN</p> 	<p>♪BGM～</p> <p>T:テロップ この映像は、スポーツ指導における体罰・暴力問題の根絶を目指した「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)」の提言に基づき、わが国における「コーチ育成カリキュラムのスタンダード」を目指して行われた、新しい時代にふさわしいコーチングのための、モデル・コア・カリキュラムの概要を紹介したものです。</p>
● データで見る現状と課題解決に向けたモデル・コア・カリキュラム		
1分00秒	<p>＊図①【体罰経験者の有無】</p> <p>＊図②【体罰・暴力に関する実態調査】</p> <p>＊図③【指導に体罰・暴力は必要か】</p> <p>＊図④【体罰・暴力を受けた学校期】</p> <p>＊図⑤【講師とテーマ一覧】</p>	<p>♪BGM～</p> <p>N 全国大学体育連合の調査によると、運動部活動経験者で、これまでに体罰・暴力を振るわれた経験があると答えた割合は、20.5%。</p> <p>N その内訳を見てみると、最も多かったのが「週2、3回」の26.8%。次いで「数ヶ月に1回くらい」の26.7%。ほぼ毎日という回答も1割ありました。</p> <p>N こうした体罰・暴力を振るわれた経験者は、部活動中に、体罰・暴力は必要と考える傾向にあります。</p> <p>N また、時期を見てみると、中学校期が一番多く、感受性の強い発達段階に体罰・暴力が振るわれています。</p> <p>N こうした現状から、スポーツが持つ教育的価値と健全性を向上させるために、新しい時代にふさわしいコーチの育成は必須であり、そのための講義テーマを設定して、カリキュラムを実施しました。</p>

Time	Picture	Action
● 運動部指導の理念と哲学		
3分30秒	<p>＊図⑤【運動部指導の理念と哲学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 高潔性 ● 運営のあり方 ● 運動部活動の意義と社会的役割 <p>＊10月5日土屋先生の講義風景に講義名とテーマをテロップで表示</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 講義風景 ● 事例の紹介 ● ロールプレイ、シェアリングの様子 ● ロールプレイ、シェアリングの様子 <p>＊10月12日池上先生の講義を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 講義の写真、PPT資料 ● ポイントをテロップで表示 <p>＊11月2日西島先生の講義を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 講義の写真、PPT資料 ● ポイントをテロップで表示 	<p>♪BGM～</p> <p>N 運動部指導の理念と哲学の講義では、大阪体育大学の土屋裕陸先生により「高潔性」をテーマに、体罰根絶の必要性について講義が行われました。</p> <p>＊講義の様子をダイジェストで見せる</p> <p>N 具体的な事例をあげながら、なぜ体罰が駄目なのか、学生に問題提起をしながら進めることで、テーマへの関心度を高めながら進めました。</p> <p>N 更に、ロールプレイやグループ分けをしてシェアリングすることで、自ら学びの大切さに気づくよう促し、講義が行われました。</p> <p>N 更に、ロールプレイやグループ分けをしてシェアリングすることで、自ら学びの大切さに気づくよう促し、講義が行われました。</p> <p>N また、京都サンガの池上正先生により「運営のあり方」をテーマに、学校クラブの正しい方向性などについて講義が行われました。</p> <p>N 首都大学東京の西島央先生においては、「運動部活動の意義と社会的役割」をテーマに、教育社会学の観点から講義がなされ、部活動とは、競技力の向上だけではなく、スポーツ、芸術、文化など幅広い世界に 触れる機会をも担っていることについて、講義が行われました。</p>
● 運動部指導者に求められる援用力		
1分00秒	<p>＊図⑥【運動部指導者に求められる援用力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 指導者としての成長、学び続ける姿勢 ● 広範囲な知識と複眼的思考力、観察学習力、マネジメント力 ● 内省、セルフコントロール ● コミュニケーションスキルの向上 <p>＊10月19日伊藤先生の講義を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 講義の写真、PPT資料 ● ポイントをテロップで表示 <p>＊10月26日吉田先生の講義を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 講義の写真、PPT資料 ● ポイントをテロップで表示 <p>＊12月14日渋谷先生の講義を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 講義の写真、PPT資料 ● ポイントをテロップで表示 <p>＊12月21日岡先生の講義を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 講義の写真、PPT資料 ● ポイントをテロップで表示 	<p>♪BGM～</p> <p>N 運動部指導者に求められる援用力の講義では、日本体育大学の伊藤雅充先生により「指導者としての成長、学び続ける姿勢」をテーマに、どんなコーチングをしたいかについて、講義が行われました。</p> <p>N 群馬大学の吉田浩之先生においては「広範囲な知識と複眼的思考力、観察学習力、マネジメント力」をテーマに、4つの観点から講義が行われました。</p> <p>N 桐蔭横浜大学の渋谷崇行先生においては「内省、セルフコントロール」をテーマに、アンガーマネジメントや、価値のあるスポーツを子供に、などの講義が行われました。</p> <p>N 日本体育協会の岡達生先生においては「コミュニケーションスキルの向上」をテーマに、講義が行われました。</p>

Time	Picture	Action
● 運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識		
0分45秒	<p>*図⑦【運動部指導に必要なスポーツ科学の基本知識】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●安全、事故防止、応急処置、スポーツ医・科学の知識の活用方法 ●競技特性に応じた指導、実技指導能力の向上 ●運動部活動の意義と社会的役割 <p>*12月7日南部先生の講義を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ●講義の写真、PPT資料 ●ポイントをテロップで表示 <p>.....</p> <p>*11月30日嶋崎先生の講義を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ●講義の写真、PPT資料 ●ポイントをテロップで表示 	<p>♪BGM～</p> <p>N 運動部指導に必要なスポーツ科学の基礎知識の講義では、日本体育大学の南部さおり先生により「安全、事故防止、応急処置、スポーツ医・科学の知識の活用方法」をテーマに、安全配慮義務や事故発生時の対応について、講義が行われました。</p> <p>N 国際武道大学の嶋崎雅規先生においては「競技特性に応じた指導、実技指導能力の向上」をテーマに、教師に求められるスキルと知識、部活動は生徒のものなどの講義が行われました。</p>
● 運動部指導における実践上の問題と対処法		
0分45秒	<p>*図⑧【運動部指導における実践上の問題と対処法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●中学校や高等学校の現場で直面する問題 ●競技力向上とアスリートファーストの向上 <p>*11月16日中小路先生の講義を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ●講義の写真、PPT資料 ●ポイントをテロップで表示 <p>.....</p> <p>*1月11日友添先生の講義を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ●講義の写真、PPT資料 ●ポイントをテロップで表示 	<p>♪BGM～</p> <p>N 運動部指導における実践上の問題と対処法においては、朝日新聞社の中小路徹先生により「中学校や高等学校の現場で直面する問題」をテーマに、体罰の実態などについて、講義が行われました。</p> <p>N 早稲田大学の友添秀則先生においては「競技力向上とアスリートファーストの向上」をテーマに、現代スポーツのアポリアやスポーツ選手のピーク年齢の低さなどについて講義が行われました。</p>
● エピローグ：総括		
2分30秒	<p>*土屋先生の授業風景や、他の先生方の事業写真、PPTをコラージュ</p> <p>*大阪体育大学のロゴ</p> <p>*黒バックに字幕テロップを表示</p>	<p>♪BGM～</p> <p>N 体罰・暴力の根絶には、コーチの育成だけではなく、競技者やその家族も含めて、正しく理解する必要があります。</p> <p>N 競技力向上には、厳しい指導は必要ですが、それは決して体罰とはイコールではありません。</p> <p>N 新しい時代にふさわしいコーチングとは、競技者やスポーツそのものの未来に責任を負う社会的な活動であり、それを常に自覚して活動するのが、新しい時代にふさわしいコーチの在り方なのではないでしょうか。</p> <p>N 新しい時代にふさわしいコーチングとは、競技者やスポーツそのものの未来に責任を負う社会的な活動であり、それを常に自覚して活動するのが、新しい時代にふさわしいコーチの在り方なのではないでしょうか。</p> <p>T:テロップ この映像は、スポーツ庁委託事業「スポーツキャリアサポート戦略」(平成28年度)におけるコーチとしてのキャリア形成支援プログラムにより大阪体育大学が制作しました。</p> <p>*映像に登場する人物の氏名・所属名などは、2016年度の撮影時点のものです。</p> <p style="text-align: right;">完</p>

DVD《運動部指導実践論》
コーチとしてのキャリア形成支援プログラム
 ～新しい時代にふさわしいコーチングを目指して～

映像はDASHプロジェクトホームページ (<http://ouhs-dash.jp/achievement/achievement01.html>) で閲覧いただけます。

体罰・暴力の必要有無(体罰経験有無別)

体罰経験あり	必要 41%	不要 59%
体罰経験なし	必要 63%	不要 37%

運動部指導実践論 講師とテーマ一覧

土屋 裕隆	大阪体育大学	運動部指導に必要なスポーツ科学の基礎知識の講義では、日本体育大学の南部さおり先生により「安全、事故防止、応急処置、スポーツ医・科学の知識の活用方法」をテーマに、安全配慮義務や事故発生時の対応について、講義が行われました。
池上 正	早稲田大学	早稲田大学の友添秀則先生においては「競技力向上とアスリートファーストの向上」をテーマに、現代スポーツのアポリアやスポーツ選手のピーク年齢の低さなどについて講義が行われました。
伊藤 雅光	日本体育大学	国際武道大学の嶋崎雅規先生においては「競技特性に応じた指導、実技指導能力の向上」をテーマに、教師に求められるスキルと知識、部活動は生徒のものなどの講義が行われました。
渡倉 康行	国際武道大学	国際武道大学の嶋崎雅規先生においては「競技特性に応じた指導、実技指導能力の向上」をテーマに、教師に求められるスキルと知識、部活動は生徒のものなどの講義が行われました。
中小路 徹	朝日新聞社	朝日新聞社の中小路徹先生により「中学校や高等学校の現場で直面する問題」をテーマに、体罰の実態などについて、講義が行われました。
友添 秀則	早稲田大学	早稲田大学の友添秀則先生においては「競技力向上とアスリートファーストの向上」をテーマに、現代スポーツのアポリアやスポーツ選手のピーク年齢の低さなどについて講義が行われました。

土屋 裕隆 大阪体育大学
基本理念(学校教育における位置づけ、現代社会におけるスポーツの意義と価値、実証性)

池上 正 早稲田大学
運動のあり方(生徒の自主性の尊重、効率的なマネジメント、中体連・高体連との関係)

伊藤 雅光 日本体育大学
指導者としての成長、学び続ける姿勢

渡倉 康行 国際武道大学
内省、セルフコントロール(アンガーマネジメントを含む)

中小路 徹 朝日新聞社
中学校や高等学校の現場で直面する問題を中心に

2. 本事業の報道資料

本事業で展開された「運動部指導実践論」は、朝日新聞社、読売新聞社、毎日新聞社、NHKより取材を受け、新聞記事への掲載やテレビ放映がなされた。以下、各社に掲載された新聞記事を示す。

■朝日新聞 平成29年(2017)1月28日 朝刊

体罰しない先生めざす

遺族「殴っても強くなるならいい」

容認・根絶 授業で討論

部活動の指導 学生学ぶ

大阪府立桜宮高の体罰問題。バスケットボール部主将の男子生徒が、顧問の教諭（懲戒免職）から暴力を受けた翌日の2012年12月23日に自殺した。教諭は傷害と暴行の罪で起訴され、有罪が確定。民事では今年2月、体罰と自殺の因果関係を認め、大阪市に損害賠償を命じる判決が出ている。

部活動での体罰や暴行をなくすため、指導者や指導者を目指す学生らに、各々の大学が独自の取り組みをすすめている。学生らは、体罰を許さないという考えを、部活動でも実践している。

大阪府立桜宮高の体罰問題。バスケットボール部主将の男子生徒が、顧問の教諭（懲戒免職）から暴力を受けた翌日の2012年12月23日に自殺した。教諭は傷害と暴行の罪で起訴され、有罪が確定。民事では今年2月、体罰と自殺の因果関係を認め、大阪市に損害賠償を命じる判決が出ている。

部活動での体罰や暴行をなくすため、指導者や指導者を目指す学生らに、各々の大学が独自の取り組みをすすめている。学生らは、体罰を許さないという考えを、部活動でも実践している。

大阪府立桜宮高の体罰問題。バスケットボール部主将の男子生徒が、顧問の教諭（懲戒免職）から暴力を受けた翌日の2012年12月23日に自殺した。教諭は傷害と暴行の罪で起訴され、有罪が確定。民事では今年2月、体罰と自殺の因果関係を認め、大阪市に損害賠償を命じる判決が出ている。

部活動での体罰や暴行をなくすため、指導者や指導者を目指す学生らに、各々の大学が独自の取り組みをすすめている。学生らは、体罰を許さないという考えを、部活動でも実践している。

■読売新聞 平成28年(2016)12月19日 夕刊

体罰頼らぬ指導模索

大体大で新たな講義

大体大で新たな講義

大阪府立桜宮高の体罰問題。バスケットボール部主将の男子生徒が、顧問の教諭（懲戒免職）から暴力を受けた翌日の2012年12月23日に自殺した。教諭は傷害と暴行の罪で起訴され、有罪が確定。民事では今年2月、体罰と自殺の因果関係を認め、大阪市に損害賠償を命じる判決が出ている。

部活動での体罰や暴行をなくすため、指導者や指導者を目指す学生らに、各々の大学が独自の取り組みをすすめている。学生らは、体罰を許さないという考えを、部活動でも実践している。

大阪府立桜宮高の体罰問題。バスケットボール部主将の男子生徒が、顧問の教諭（懲戒免職）から暴力を受けた翌日の2012年12月23日に自殺した。教諭は傷害と暴行の罪で起訴され、有罪が確定。民事では今年2月、体罰と自殺の因果関係を認め、大阪市に損害賠償を命じる判決が出ている。

部活動での体罰や暴行をなくすため、指導者や指導者を目指す学生らに、各々の大学が独自の取り組みをすすめている。学生らは、体罰を許さないという考えを、部活動でも実践している。

大阪府立桜宮高の体罰問題。バスケットボール部主将の男子生徒が、顧問の教諭（懲戒免職）から暴力を受けた翌日の2012年12月23日に自殺した。教諭は傷害と暴行の罪で起訴され、有罪が確定。民事では今年2月、体罰と自殺の因果関係を認め、大阪市に損害賠償を命じる判決が出ている。

部活動での体罰や暴行をなくすため、指導者や指導者を目指す学生らに、各々の大学が独自の取り組みをすすめている。学生らは、体罰を許さないという考えを、部活動でも実践している。

■井川加菜美(2016)指導者育成、大体大が講義、伝統、経験から脱却、毎日新聞、2016.10.08
<https://mainichi.jp/articles/20161008/ddn/041/100/010000c>



■成田有佳(2016)なるほドリ「中学校の運動部に関する提言が出たって?」(毎日新聞和歌山)



■近藤優美子(2016)体罰なしの部活指導を学ぶ(NHK大阪特集)



平成28年度スポーツ庁受託事業
「スポーツキャリアサポート戦略」における「コーチとしてのキャリア形成支援プログラム」実施報告書

平成29年3月31日

発行：大阪体育大学 学長室DASHプロジェクト/スポーツカウンセリング土屋研究室

〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1

TEL:072-453-7021 FAX:072-453-8818

Web:大阪体育大学(<https://www.ouhs.jp/>)

DASH プロジェクト(<http://ouhs-dash.jp/>)